

仙台市文化財調査報告書第116集

# 燕沢遺跡

1988年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第116集

つばめ さわ  
燕 沢 遺 跡

1988年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

## 序 文

燕沢遺跡の調査は昭和56年・57年に続き、3度目になります。当遺跡は古くから繩文土器や瓦を出土するところとして知られており、特に瓦を出土するところから“燕沢廃寺”があったという言い伝えがあります。しかしながら文献などには見られず、本当に寺院跡なのか、または役所があったものなのかの結論はまだ出ておらない遺跡です。そういう意味では“幻の遺跡”であると言えましょう。古代商業地帯として知られる台原・小出原丘陵の東端にあり、北・東・南側を見通せる最良の場所に立地しています。ここに立った古代人は、遠く多賀城や陸奥国分寺を望観することができたでしょう。

また、比丘尼坂、千人塚古墳、普応寺にある横穴古墳、蒙古の碑、古街道のあった所など、原始から中世まで連綿と展開された歴史の交差点でもあります。

こうした文化遺産は市民の宝として永く後世に継承して行くことが、これからのもちづくりに大切なことと考えます。日頃、文化財行政に対しましては多大の御協力をいただき、担当する当教育委員会にとりましては誠に感謝にたえません。今後とも市民各位の絶大な御協力を念願し、また発掘調査から報告書作成の間、ご協力をいただきました地元町内の皆様や諸学兄に対し、記して感謝いたし序といたします。

昭和63年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

## 例　　言

1. 本書は擁壁工事に伴う燕沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の執筆はI～IV、V 4、VI 1～5・7、VIIを結城博一が、V 1～3・5～8、VI 6を中富洋が分担した。編集は結城、中富が担当した。
3. 本書の執筆に当っては、当市文化財課職員はもとより、東北歴史資料館の藤沼邦彦氏・小井川和夫氏・吉沢幹夫氏などの助言を賜わった。
4. 本書中の方位は磁北で統一して記載してある。なお磁北は真北より西偏約7°20'である。
5. 本書第1図の地形図は国土地理院発行2万5千分の1「仙台東北部」の一部を使用した。
6. 本書図中の水系高は標高を表わしている。
7. 本書中の土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原1973)を使用した。
8. 本調査から報告書作成に要した費用は開発者側負担で行われた。
9. 本調査の出土遺物は仙台市教育委員会が一括して保管している。

## 調　　査　　要　　項

遺跡名称 燕沢遺跡（仙台市文化財登録番号C-101）

所在地 仙台市燕沢東三丁目528-1、2

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局教育部文化財課調査係

担当職員 主事 結城慎一・中富 洋 教諭 千葉 仁

調査期間 昭和62年9月24日～10月30日

調査対象面積 約260m<sup>2</sup>

調査面積 約350m<sup>2</sup>

地権者・開発者 大本正喜・大本道子・大本博文

調査協力 株式会社弥生設計 鈴木喜勝

調査参加者 庄子錦一郎 平田正二 加藤貴久 根本辰江 渡部のぶ子 平塚英江 佐藤英子  
大友百合子 山口胖

整理参加者 庄子錦一郎 根本辰江 郡山和彦 若生久美 本多由美 赤井沢勝利 谷津和広  
大森美知子 佐々木敬之 高村朋子 小野寺健二 小野寺理香 佐々木由美

# 本文目次

## 序 文

## 例 言

### 調査要項

I. 調査に至る経過	1
II. 造跡の位置と周辺の環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
III. 調査の方法と経過	3
IV. 調査区の断面状況	4
V. 発見造構	7
1. 積穴性居跡	7
2. 積穴造構	8
3. 溝跡・溝状造構	12
4. 墓 墓	12
5. 土 坑	13
6. 柱 穴	15
7. ピット	17
8. 性格不明造構	17
VI. 出土遺物	18
1. 繩文土器	18
2. 弥生土器	18
3. 石製品・礫石器	19
4. 須恵器	19
5. 上師器	19
6. 瓦	20
7. その他の遺物	23
VII. まとめと若干の考察	23
出土遺物実測図	26
出土遺物観察表	48
造構・遺物写真	57

## 図 表 目 次

第1図 調査地点と周辺遺跡	2
第2図 調査区断面図(南区)	5・6
第3図 S I 1住居跡	8
第4図 造構配置図	9・10
第5図 S I 2住居跡	11
第6図 S I 3竪穴造構	11
第7図 SD 1・2溝跡、SD 3溝状造構	13
第8図 草 墓	14
第9図 SK 1土坑	15
第10図 柱 穴	16
第11図 SX 1性格不明造構	17
第12図 SX 2性格不明造構	18
第13図 土師器坏の分類	19
第14図 繩文土器拓影	27
第15図 繩文土器・弥生土器拓影	28
第16~18図 石器Ⅰ~Ⅲ	29~31
第19図 須恵器・土師器Ⅰ	32
第20・21図 土師器Ⅱ・Ⅲ	33・34
第22~34図 瓦Ⅰ~Ⅳ	35~47
第35図 その他の出土遺物	47
表1 周辺の遺跡地名表	3
表2 ピット記表	25
表3 出土遺物観察表	48~56

## I. 調査に至る経過

燕沢遺跡(仙台市文化財登録番号C-101)は仙台市の北部に東西に延びる台原・小田原丘陵の東端に位置する縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡である。特に、布目瓦が出土する遺跡として古くから知られており、寺院または官衙の存在が考えられてきた所である。<sup>(註1)</sup>この遺跡がのっている丘陵は年々宅地化が進み、当遺跡にも及んできている。昭和56年、遺跡の中央部分にある地域で宅地造成に伴う発掘調査が行われ、掘立柱建物跡・土坑・溝跡が確認され、布目瓦や土器類が出上り、<sup>(註2)</sup>昭和57年には遺跡北部の北向き斜面の畠が区画整理されることになり、事前調査を行った結果、住居跡・掘立柱建物跡・方形周溝構造・土坑・溝跡などの発見に伴い、多量の土器類などが出土した。<sup>(註3)</sup>土器類の中には墨書きのあるものもあり、仙台市で初めての発見となった漆紙文書もあった。

今回調査することとなった箇所は南側斜面で、昭和60年に一旦盛土して宅地として造成されていた所であるが、擁壁を造ることに計画変更されたので、開発者と協議のうえ、昭和62年9月24日より発掘調査を実施するに至った。

## II. 遺跡の位置と周辺の環境

### 1. 地理的環境

燕沢遺跡は東北本線東仙台駅より北東約2kmの地点、仙台市燕沢東三丁目・岩切字山崎西に所在する。

遺跡周辺の地形を外観すると、奥羽山脈から分岐して延びる富谷・七北田丘陵(仙台市北部においては台原・小田原丘陵の呼称がある)が東へ張り出しており、両丘陵間を七北田川が東流しながら開析し、平野部において梅田川を合流して太平洋に注いでいる。七北田川は中流域の両岸に河岸段丘を発達させ、丘陵面には要害地形が見られる。また、丘陵端より太平洋に向けて広大な沖積平野を形成せしめ、当河川の周辺には自然堤防の地形も見られる。

遺跡は台原・小田原丘陵の東端部、七北田川右岸の標高20~30m程の段丘面に立地する。平野部との比高差は15~20m程度である。この段丘面は南側で急斜面の要害地形、北側は小河川が開析した谷地形が見られる緩斜面となっている。このように遺跡の立地として、平坦面が少ないと緩斜面に遺跡の広がりがみられる特徴がある。

### 2. 歴史的環境

燕沢遺跡周辺は良好な地理的環境から数多くの遺跡が分布している。特に、七北田川両岸の丘陵面と同河川が形成した自然堤防上に集中している。



第1図 調査地点と周辺遺跡

台原・小田原丘陵は宮城県内でも屈指の古代窯業地帯で、総称して台原・小田原窯跡群と言われている。第1図に燕沢遺跡周辺の主な遺跡を掲載しておいたように、大蓮寺窯跡・安養寺下窯跡・安養寺中洲窯跡と当遺跡西側に連なっている。大蓮寺窯跡は特に初期須恵器を生産した窯跡として国内でも著名な遺跡である。

燕沢遺跡北側を七北田川が東流しているが、この河川を挟んだ一帯が中世の歴史舞台となっている。中世の遺跡では、七北田川左岸丘陵上に国指定史跡である岩切城跡がみられる。これは、源頼朝によって陸奥国府の留守職に任命された伊沢家景が構えた館で、麓の留守氏のぼだい寺である東光寺には石窟や板碑が多数見られる。その他、小鶴城や篠森城など、いくつかの中世の館跡が知られており、当地は鎌倉時代から戦国時代末期にかけて要衝の地であったことがうかがわれる。留守家文書によると、当時「冠川」と呼ばれていた七北田川に「今市橋」が架けられており、冠屋市場・河原宿五日市場・在家などの地名がみられ、国府へ通じる道に沿って、あるいは七北田川流域に聚落が発達しており、すでに商業活動も盛んに行なわれていたようである。

第1図には掲載していないが、当遺跡から東北東約5kmの位置に陸奥国府であった多賀城跡・同付属寺院跡が、また南南西約5kmには陸奥国分寺跡・同尼寺跡が一望できる。

燕沢遺跡周辺は縄文時代から連続と続く多くの遺跡群で構成されており、特に中世においては、政治・経済・文化的一大中心地であったと考えられる。

No.	遺跡名	種別	立地	時代	No.	遺跡名	種別	立地	時代
1	火生武藏穴跡	横穴墓	丘陵	古墳～平安	11	吉瀬沢遺跡	散在地	丘陵	平安
2	台原御藏穴跡	横穴墓	丘陵斜面	古墳～平安	12	燕沢遺跡	山腹?	吉瀬花	陸奥
3	岩切城跡	城	丘陵	中世	13	千人塚古墳	円	鹿	丘陵斜面
4	東光寺横穴跡	横穴墓	丘陵斜面	古墳～平安	14	山崎城遺跡	散在地	丘陵	鷹文
5	今市遺跡	聚落跡	自然場所	平安～中世	15	安養寺中洲窯跡	窯	丘陵斜面	平安
6	大正區遺跡	散在地	自然場所	平安	16	安養寺下窯跡	窯	丘陵斜面	平安
7	岩切場中遺跡	聚落跡	自然場所	縄文～平安	17	大蓮寺窯跡	窯	丘陵斜面	六朝～奈良
8	船荷前遺跡	散在地	自然場所	小化	18	須恵寺横穴跡	横穴墓	丘陵斜面	古墳～平安
9	北畠遺跡	聚落跡	丘陵山林	縄文～平安	19	小畠遺跡	散在地	丘陵	中世
10	篠森城跡	城	丘陵	小字					

表1 周辺の遺跡地名表

### III. 調査の方法と経過

今回の調査地点は台原・小田原丘陵の東端にあたり、遺跡の北東部で、周囲が段々畠として利用されているところである。標高は27～31m程度で、全体的に南東側に傾斜しており、畠地となっていたところに2年ほど前に盛り土をして宅地としたところである。

調査は擁壁工事で遭損が壊される部分を対象としたため、またそれが変形なため、土地境界杭を基準として、工事対象区と同様な地区設定をすることにした。擁壁は変形な土地の三辺に

造られるため、調査区名は大きく東区・南区・西区と呼称することとした。

調査は1~3m程の宅地盛り土と耕作土を重機で排除した。西区及び東区はほぼ全面が耕作直下が地山となっていたが、南区においては、相当な攪乱が入っており、瓦や上器類が多量に投棄されている状況であったので、その範囲を平板実測し、写真撮影して、遺物を取り上げてから、さらに遺構が検出される直上まで重機で下げていくという過程をとった。

計画では擁壁工事幅は1.5~2m程であったが、厚く盛り土されていることもあります。実際排土した調査区幅は1~6m程であり、調査3区の総長は約130mになった。

遺構の実測等は、全体を見通せないため、土地境界杭を図面に入れるように配慮し、個々の遺構は水糸を張って、また遺構配置図は平板を使用し、分割して行った。

#### IV. 調査区の断面状況

調査区内の断面状況は、西区・東区では耕作土直下が地山となっているため、南区の状況についてふれることにする。また前項でも述べたが、思った以上に削平・攪乱が大きく、基本層と明示できるようなところではなく、発見遺構のすべてが地山面であることをここで確認しておきたい。

南区はそのほぼ中央を境に西側・東側の断面の状況が大きく異なる(第2図)。その中央付近には、後に詳述するが、墓壙が発見されている。

##### 〈西側の状況〉

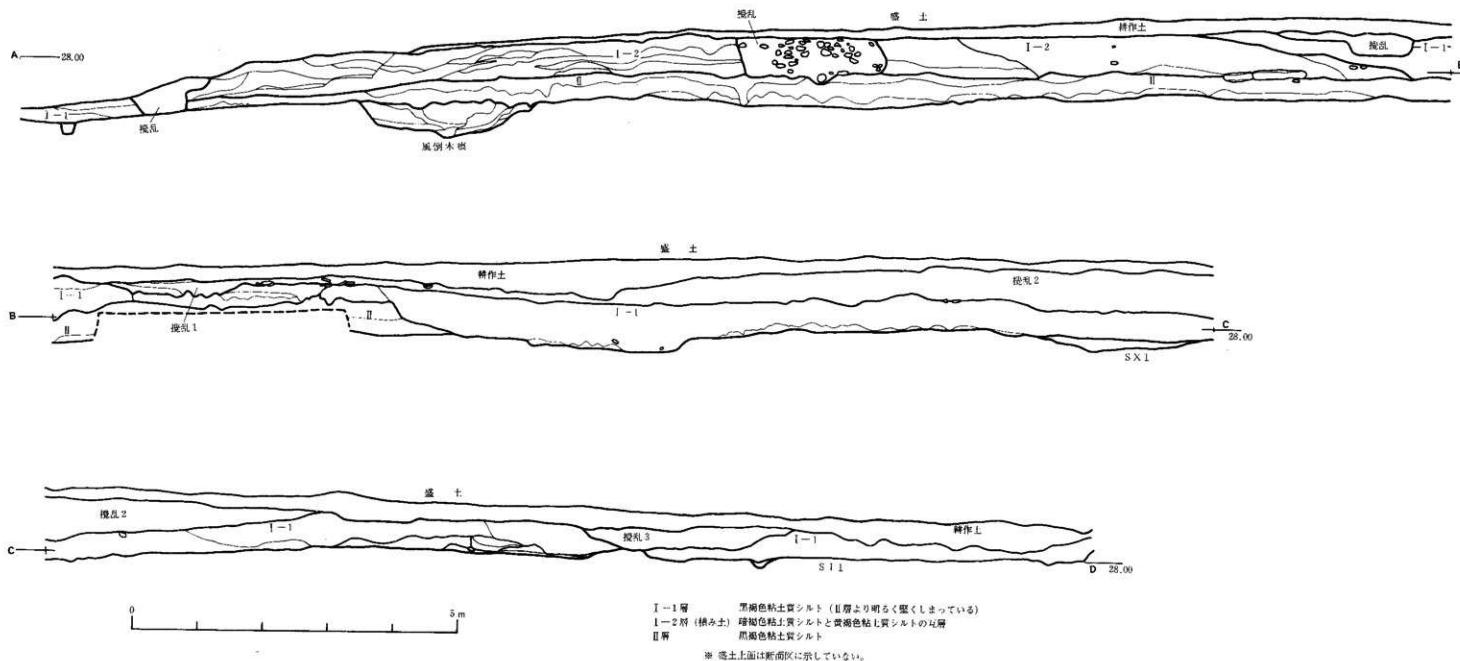
3m弱の山砂を主とする盛り土を排除すると平均10cmほどの畑耕作土があり(表土)、その下には現状で最大厚約60cmの積み土(I-2層)が見られる。

断面上で積み土の幅は約19mにおよぶ。その西半が暗褐色系と黄褐色系粘土質シルトのほぼ水平方向の互層となっており、東半もやはり暗褐色系と黄褐色系粘土質シルトの東下がりの層で、積み手の大きな違いが認められる。この積み土全般には灰白色を呈する凝灰岩の岩くずを霜降り状に含んでいる。この積み土中には少量ではあるが繩文土器片や炭化物を含んでいる。

積み土の下の層(II層)は黒褐色の粘土質シルトで、繩文土器片、若干の弥生土器片、岩くずを含む層で、しまってはいるが砾くはない。層厚は約30cmで、地山直上に堆積した層である。この層は部分的に3層に細分できるが、地山に向かって漸移的に変化し、粘度を増す。

I-2層とII層の層断面には砂質凝灰岩を板状に加工した2枚の石が密着した状態で発見された。

以下が地山となっており、この面で風倒木痕が検出できた。地山は黄褐色粘土質シルト、その下が礫層である。



第2図 調査区断面図

### 〈東側の状況〉

3m弱の山砂を主とする盛り土と10~50cmの耕作土がある状況は西側と同様であるが、西側のⅠ、Ⅱ層にあたる部分が大きく異なる。

まず擾乱が耕作土直下に入っている。これは東側に広く入っているものであり、部分的に深く掘り込まれているところ（擾乱1~3）に、土師器、瓦等がまとまって投棄されている状況で確認されている。

その下の層は大きく地山まで一つの層（I-1）で、黒褐色で堅くしまっている粘土質シルトである。この土色・土性は前述したⅡ層と同様な記載となっているが、堅くしまっている点や黒褐色というよりはこげ茶色ないし紫色ぼく見えるという相違がある。縄文土器片や土師器片を若干含む。この層は、南区ほぼ中央の墓壙より約2m東に行ったところから、西側のところで記したⅡ層を切っており、さらに若干地山をも削ったところに堆積している状況である。地山を削った上に堆積している状況は、地山面で検出されたSII1住居跡がほぼ床面で検出され、壁の立ち上がりが見られないことからも判断される。

I-1層の下は地山となっており、この面でSX1性格不明遺構・SK1土坑・SII1住居跡が検出された。地山は、大部分がその上の方が黄褐色粘土質シルトで、部分的に地山が深く削られているところでは、下に続く疊層が表れている。しかしながら、東側の東端にあるSII1住居跡付近から東側は、黄褐色シルトの下に灰白色の凝灰岩とかわる。この凝灰岩は細く割れが入っているものであり、黄褐色シルトや、それが削平されて耕作土等が直接その上にきているところは、褐色の土粒がその亀裂をつたって浸透している。

## V. 発見遺構

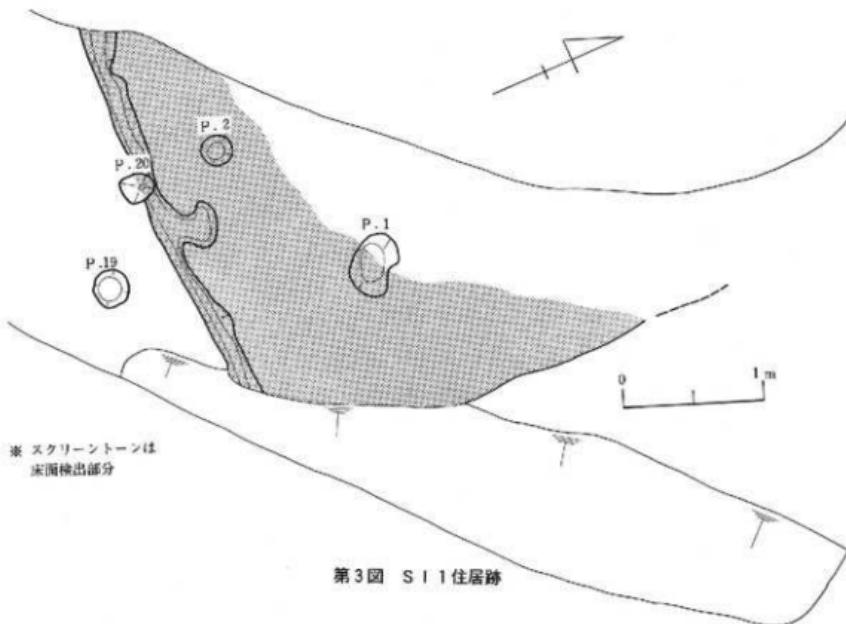
今回の調査で発見された遺構は、次のようである。竪穴住居跡（二棟）、竪穴遺構（一基）、溝跡（二条）、溝状遺構（一条）、土坑（一基）、掘立柱柱穴（六基）、ピット（多数）、性格不明遺構（二基）。遺構の検出は全て地山面で行ったが、遺存状態は、全体的に削平が著しく不良であった。

### 1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は南北・東西で各一棟ずつ発見されたが、いずれも遺存状況は不良である。

#### SII1住居跡（第3図）

南北と東西のコーナー付近で確認されたが、かなりの削平をうけており、検出されたのは床面と南北の周溝の残存の一部である。平面形は遺構の大半が削平されているうえ、南北コーナーが擾乱に切られているため不明である。確認長は南北で2m70cm、東西で1m50cmまで計ることができた。東西の軸方向は、ほぼ磁北を指す。壁の立ち上りは観察できない。



第3図 S I 1住居跡

東辺の周溝残存は幅10cm~30cm、深さ10cm~15cm程を計るが、中央部で乱れがみられる。

ピットが2個検出されたが、いずれも柱痕跡は認められない。P<sub>1</sub>は楕円形で長軸45cm、短軸25cm、深さは50cm程である。P<sub>2</sub>は径20cmの円形を呈し、深さは10cmを計る。

#### S I 2住居跡（第5図）

東区で確認された。削平のため、遺存は不良である。平面形は造構の北半がSD1溝路に切られ、南西部が調査区外へ延びているものの、検出部分ではコーナーが丸味を持っており、隅丸方形を呈するものと考えられる。各辺の確認長は南辺1m95cm、西辺2m20cm、北辺35cmを計る。西辺の軸方向はN-12°-Wである。

堆積土は2層に分かれ、褐色系のシルト層で構成されている。

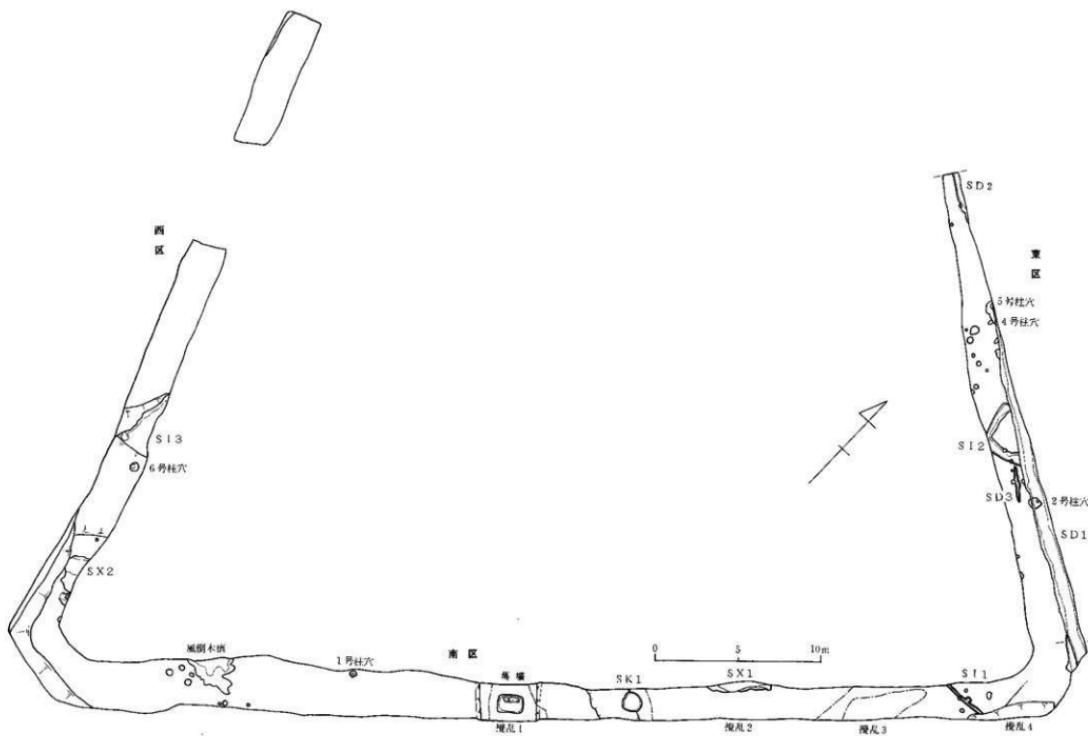
壁は周溝の底面から急角度で立ち上り、壁高は7cm~15cm程である。周溝は幅が40cm~75cmと広い。深さは5cm~8cmである。内側の壁は緩やかに立ち上る。

ピットが3個伴っているが、柱痕跡も認められず、この住居跡との関連は不明である。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は周溝を切る円形のピットである。P<sub>1</sub>は径25cm、深さ23cm、P<sub>2</sub>は径10cm、深さ5cm程である。P<sub>3</sub>は上端を切っており径15cm、深さ17cmである。

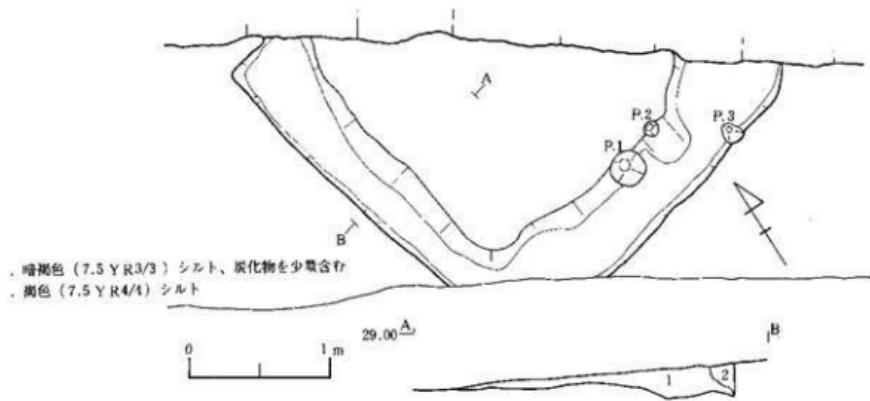
遺物は堆積土中から繩文土器と土師器の細片が少量出土した。

#### 2. 竪穴造構

竪穴造構は西区から一基検出されたが、削平が著しく造構の全容を知りえない。また堆積



第4図 造構配置図



第5図 S I 2 住居跡

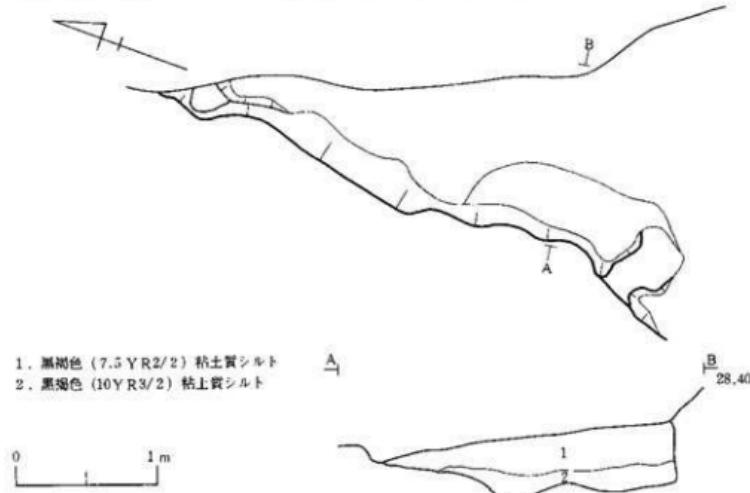
土中から弥生土器が出土した。

#### S I 3 整穴遺構（第6図）

削平を受けており、調査区内遺構の過半は失われている。検出されたのは西辺のみで、平面形は分からぬ。検出部分で西辺の確認長は4mを計り、軸方向はN-10°-Eである。

堆積土は2層に分層することができ、いずれも黒褐色の粘土質シルトである。

壁は底面から緩やかに立ち上り、壁高は調査区壁との接点付近で30cmであるが、南ほど削



第6図 S I 3 整穴遺構

平のために低くなり、中央部分では20cm程を計ってやがて消滅する。

遺物は堆積土中より、弥生土器片が2点と縄文土器片が少量出土した。

### 3. 溝跡・溝状遺構

東区で二条の溝跡と一条の溝状遺構が検出された。溝跡は比較的良好な遺存状態であったが、溝状遺構は削平を受けており状況は悪い。

#### S D 1 溝跡（第7図）

東区の調査区北壁に沿って検出された。削平を受けているものと考えられるが、比較的遺存の状態は良い。遺構が調査区外へ延びるため、全体の規模は不明である。確認長は南辺で21mである。溝跡の両上端は検出されていないが約1mになるものと思われ、底面幅は50cm～70cmで、深さは30cm～40cmである。方向はN-62°-Wであるが、調査区上部（北西）へ行くに従って、若干北方向へ曲っている。なお、この溝跡は斜面に掘られたものであるが、底面の最高部と最低部では約1.8mのレベル差を計る。壁は南壁では底面から急角度で、北壁は緩やかに立ち上る。

堆積土は上下2層に分かれ、両層とも暗褐色の粘土質シルトであるが、下層は岩片を多く含んでいる。

遺物は堆積土中から多量の古瓦片、土師器片と少量の須恵器小片、縄文土器小片及び銅製品が1点出土した。

またこの溝跡はS I 2住居路、2号柱穴及び4、5号柱穴と重複関係にあるが、S I 2住居跡、2号柱穴を切り、4、5号柱穴に切られている。

#### S D 2 溝跡（第7図）

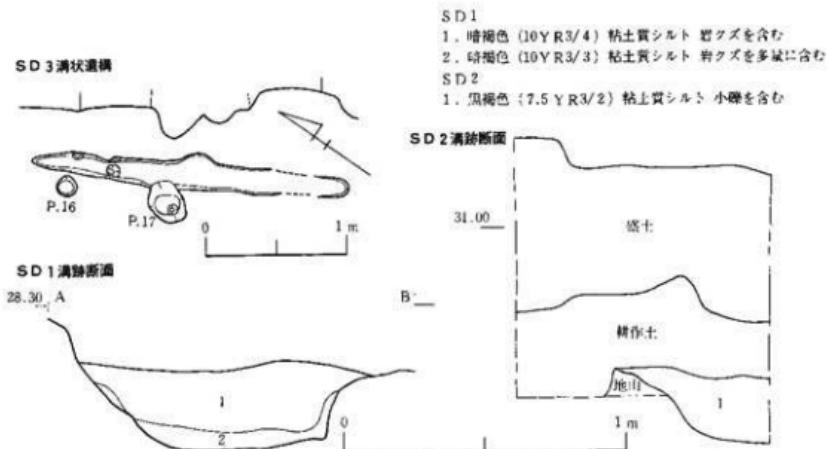
東区の調査区北西端付近で検出された。南辺の一部を確認しただけであるため、遺構の規模は不明である。同調査区内のS D 1と調査区内外では同一延長線上にないことからS D 1とは別扱いにした。南辺の確認長は3.2mで、深さは検出部分で40cm～45cm程度を計る。壁は底面から軽く弯曲しながら立ち上る。

堆積土は黒褐色の粘土質シルトで、検出部分では分層することができなかった。遺物は堆積土中から少量の土師器小片、古瓦片が出土した。

#### S D 3 溝状遺構（第7図）

東区で検出された。削平が著しく、底面近くを僅かに検出したもので、遺構の性格は分からぬ。新しい時期の耕作に伴う痕跡である可能性も考えられる。確認長は2.2mで、検出部分での上幅は20cm程度、底面幅は15cm程、深さは2cm～5cmである。方向はN-50°-W。

堆積土は黒褐色の粘土質シルトの單層で、縄文土器細片が数点出土した。



第7図 SD 1・2溝跡、SD 3溝状遺構

#### 4. 墓 壇 (第8図)

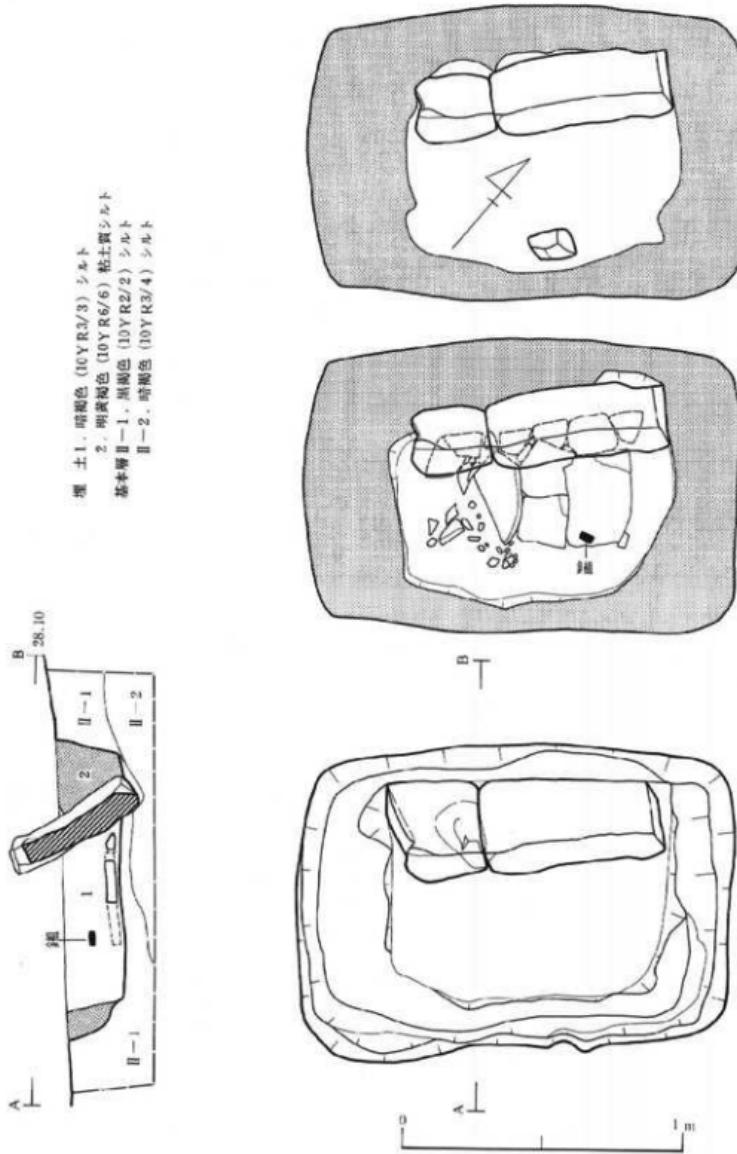
南区中央部で擾乱1を掘りあげることによって発見された。加工した2枚の石の上部は擾乱1の上部器等を取り上げ終了しないうちに確認されていたが、擾乱や耕作等があったため、墓壇掘り方ラインが明確になったのはⅡ層上面まで下がった段階であった。墓壇長軸は南西—北東の向きであり、方位に關係なく、傾斜の方向に合わせて造ったものと考えられる。

墓壇掘り方は長軸155cm・短軸105cmで、その中に長軸100cm・短軸80cmほどの石組みの上体部がある。残存していた石組みの状況は図のとおりである。北西側長辺に表面が削り調整されている厚さ約10cmの2枚の切り石が南北方向に倒れかかるように発見され、底面には厚さ2、3cmに割った板状の石が敷かれていた。敷き石の南西部が欠落していることや擾乱が直上まで確認されている等の状況から、本来は北西辺だけでなく、他の三辺にも切り石が立てられ壁を形成していたと思われ、さらに天井石も据え置かれていたものと考えられる。墓壇を切断して断面を観察したが、壁を形成する石を立てるために特に掘り込みをした形跡は認められなかった。以上よりこの石室状空間は長軸80cm・短軸45cm・高さ47cm程のものであったと考えられる。

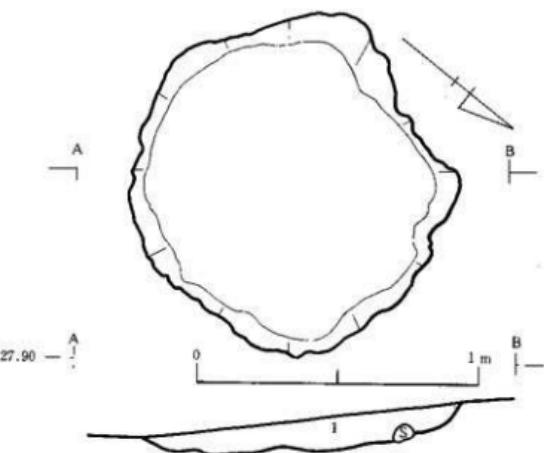
出土遺物としては、縄文土器片や瓦片などがあるが、当墓壇関連遺物と思われるものは、主體部堆積土中より刀の部品である鑑(第35図1)だけである。墓壇掘り方埋土は、明黄褐色粘土質シルトでしまっており、主體部の堆積土は暗褐色シルトでややしまっている。

#### 5. 土 坑

土坑は南区で一基のみ検出された。



第8図 基 準



第9図 SK 1土坑

1. 黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質シルト、大小の礫を含む

#### SK 1 土坑 (第9図)

削平が及んでおり、遺構のかなりの部分が失われているものと考えられる。検出部分での平面形は不整な円形で、径は1.2m程、深さは7cm~10cm程度である。壁は底面から緩やかに立ち上る。

堆積土は単層で、岩片や炭化物を含む黒褐色の粘土質シルトである。遺物は堆積土中より、縄文土器小片及び磨石が2点出土した。

#### 6. 柱穴

掘立柱の柱穴が東区で四基、西区、南区で各一基、合計六基検出された。いずれも単独で確認されたもので、組み合う他の柱穴を発見することはできなかった。そのためこれらの柱で構築される建物の方向、規模も知ることができなかった。

##### 1号柱穴 (第10図)

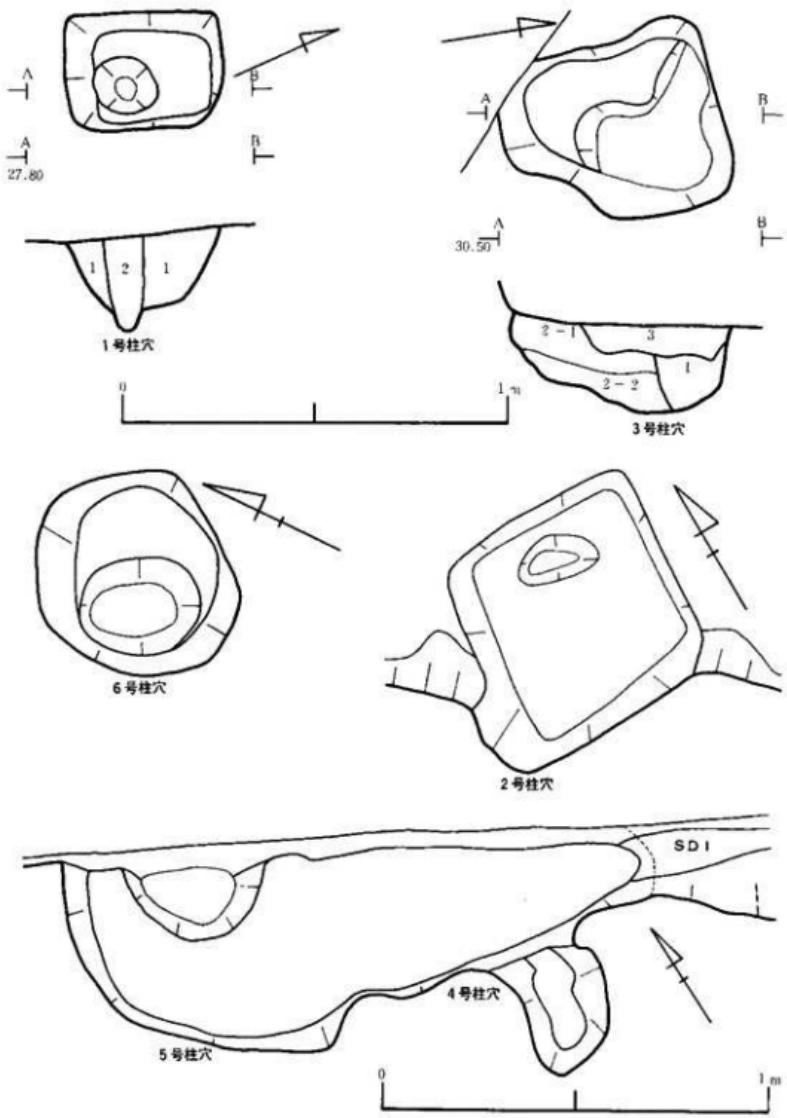
南区で検出された。平面形はほぼ長方形を呈し、長軸は40cm、短軸は30cm程を計る。深さは20cm程度である。検出時に径10cm程の柱痕跡を確認した。

##### 2号柱穴 (第10図)

東区で検出されたものでSD 1に切られている。平面形はほぼ方形を呈し、大きさは65cm×60cm程度である。深さは35cm~40cmである。径15cm程の柱痕跡が確認された。

##### 3号柱穴 (第10図)

東区で検出された。柱は抜き取られており、抜き取り痕跡を伴っている。柱穴掘り形はほぼ長方形を呈し、長軸50cm程度、短軸40cm程度で、深さは20cm程度を計る。抜き取り穴は掘り形北辺



1号柱穴

1. 黒 (7.5 YR 2/1) 粘土質シルト  
2. 黒褐色 (7.5 YR 2/2) 粘土質シルト

3号柱穴

1. 増褐色 (7.5 YR 3/3) 粘土質シルト  
2-1. 褐色 (7.5 YR 4/4) 粘土質シルト  
2-2. 哈褐色 (5 YR 3/2) 粘土質シルト

3. 暗褐色 (5 YR 3/2) シルト  
※2は抜き取り穴である。

第10図 1・2・3・4・5・6号柱穴

から掘られている。

#### 4号柱穴（第10図）

地山面での遺構確認の際に、5号柱穴及びSD1溝跡と重複関係にあると思われる方形プランを検出した。しかしながら、柱痕跡が確認されないうえ、断面において5号柱穴との重複を確認することができなかった。

#### 5号柱穴（第10図）

東区で北壁と接して検出されたもので、SD1に切られている。平面形は北壁と接しているうえに、東側が初め4号柱穴とした落ちこみで乱れているため明確ではないが、残存部から隅丸方形を呈するのではないかと考えられる。深さは25cm～30cm程度である。径30cm程度の柱痕跡が確認された。

#### 6号柱穴（第10図）

西区で検出された。平面形は不整な円形で、径は50cm程度、深さは20cm程度を計る。径20cm程度の柱痕跡を確認した。

### 7. ピット（表2）

ピットは南区、東区で合計20個検出された。南区西部と東区北部ではある程度のまとまりがみられるが、特に規則性は持たない。また遺物の出土もほとんどなく、その性格も不明である。

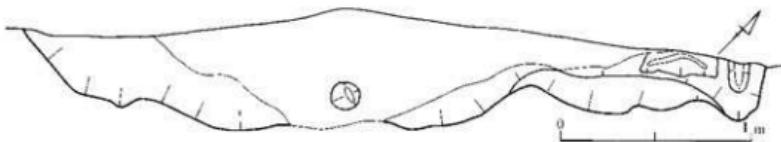
### 8. 性格不明遺構

南区・西区でそれぞれ一基ずつ不整形なプランを検出し精査を行ったが、その性格を知るには至らなかった。

#### SX1性格不明遺構（第11図）

南区で調査区壁に接して検出された。平面形は遺構が調査区外へ延びるために明確ではないが、検出部分から不整形な構造を呈するものと考えられる。検出幅は9.5m、深さは4cm～16cmである。中央部にはピット状の落ち込みがある。壁は緩やかに立ち上る。

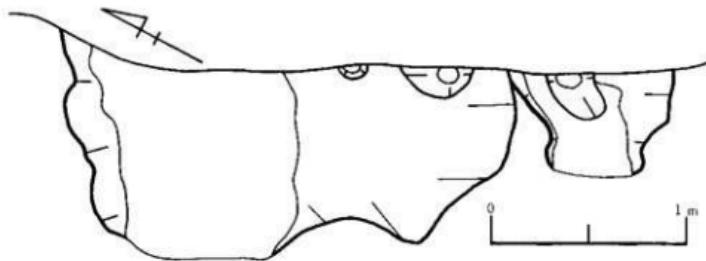
堆積土は4層に分かれると、1層の褐色シルトが土体をなす。遺物は縄文土器細片、磨石が堆積土中より少量出土した。



第11図 SX1性格不明遺構

#### SX2性格不明遺構（第12図）

西区で調査区壁に接して検出された。削平を受けている。平面形は遺構が調査区外へ延びる



第12図 S X 2性格不明造構

ために不明であるが、検出部分は不整形の楕円形プランが二つ重っている。検出幅は3.2cm、深さは5cm~15cmである。底面は概ね平坦である。壁は緩やかに立ち上る。

堆積土は4層に分けることができ、褐色系のシルト及び粘土質シルトで構成される。

## VI. 出土遺物

出土した遺物は縄文時代から平安時代にまたがり、小破片から完形資料まであり、さらに遺構出土の遺物が少なく、ほとんどが攪乱からの出土であるため、同一基準で分類するのは不可能である。したがってある程度時代をおって種類ごとに分類し、概要を記すことにする。出土遺物には縄文土器・弥生土器・石器・須恵器・土師器・瓦・金属製品・七製品・鉄滓がある。

### 1. 縄文土器 (第14図、15図1~13)

すべて破片資料であり、胎土に繊維を含む土器群 (I群) が主体をなし、繊維を含まないもの (II群) は約12%と若干である。

I群の土器は、口縁部片 (1類)、体部片 (2類)、底部片 (3類) に分けられ、さらに単節縄文 (a)、複節縄文 (b)、羽状縄文 (c)、撚糸文 (d)、ループ文 (e)、組み紐文 (f)、爪形文 (g) のものに細分できる。I-2類が約72%であり、その中で I-2-a に該当するものが約45%、I-2-e が約23%、I-2-c が約18%となっている。時期的には早期~前期のものと考えられる。

II群の土器は若干であるが、口縁部片 (1類)、体部片 (2類)、底部片 (3類) に分ける。さらに単節縄文 (a)、沈線と単節縄文の組み合わせ (a')、撚糸文 (d)、条痕文 (h) のものに分けられる。点数が少ないため、それぞれのパーセントは出せない。時期的には II-3-h が早期、II-1-a、II-2-d が中期から後期、II-2-a' が後期以降のものと考えられる。

## 2. 弥生土器 (第15図14~18)

弥生土器片と認識できたものは5点である。特に分類せず、詳細は表3の観察表にまかせたい。S13竪穴遺構出土の2点は十三塚式のものと考えられる。

## 3. 石製品・礫石器 (第16、17、18図)

図示した石鎌、石斧、石錐、スクレーパー、石皿、磨石などの他に、フレーク、剝片が出土している。

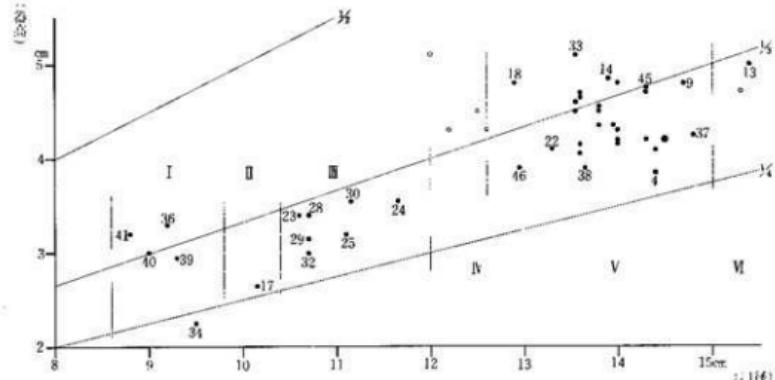
## 4. 須恵器 (第19図1~6)

小破片が多く、図示できるものは少量であった。器種としては壺、瓶、甕がある。壺のうち第19図3、4に示したものは底部に墨書「酒院」( )と「叶」( )がある。壺底部切り離しは回転系切りである。

## 5. 土師器 (第19図7~21、20図、21図)

土師器は擾乱とSD1溝跡からの出土が多く、器種としては壺片が大部分で、その他、甕片が若干である。そのうち図示できたものの大部分は擾乱出土のものである。出土したものうち法量のわかる壺を第13図に器高を縦軸に、口径を横軸にしてグラフ化した (●印)。その結果、今回出土したものは五つのグループに分けられたが、以前に調査したものも合わせると7グループに分けられた。それをI~VII類ととらえることにするが、VII類は今回出土壺の法量より大きく、この図内には掲載できなかった。以前の資料は今回出土資料の範囲外になるものを○印でドットして参考としたものであるが、多くはV類に入ることを指摘しておく。

I類a (第19図7) 一番口徑の小さいグループで、その中でも器高が一番低い。器高/口径が $\frac{1}{4}$ より若干下回るものである。内面黒色処理され、底部回転ヘラ切りのものである。灯油痕が付着している。



第13図 土師器壺の分類

※番号は登録番号を示す。

I類b (第19図8~11) 一番口径の小さいグループであるが、器高／口径が均前後にくるものである。底部は回転糸切りである。8は内外面黒色処理され、外面のみにミガキが見られる。他は外面とも黒色処理されてなく、ミガキもない。8以外は灯油痕が見られる。

II類 (第19図12) 口径10cm強のものであり、器高／口径が均より若干下回るものである。内面黒色処理でミガキがあり、底部は回転糸切りである。灯油痕がみられる。

III類 (第19図13~19) 口径が10.5cm~11.8cmほどのものであり、器高／口径が均~均の範囲にくるものである。15以外は内面黒色処理されている。13、14、16、17は胎土に砂粒が多く、また白色針状物質を含み、色調は上ににぼい褐色を呈するもので、黒色処理も他と比較すると全体的に黒ずんでいるというくらいであり、ミガキは見られない。内面底部中央がヘソ状にややくぼんでいる。18、19は内面にミガキがみられる。底部は磨耗してはっきりしないもの以外は回転糸切りである。13、14、17以外は灯油痕が見られる。

IV類 口径12~12.6cmほどのもので以前の調査で出土したものである。器高／口径が均~均にくるものであり、将来的には資料の増加により、V類と合わせて再吟味が必要になるものと思われる。内面黒色処理でミガキがあり、底部回転糸切りである。参考資料である。<sup>(注6)</sup>

V類 (第19図20・21、20図、21図1~11・13) 口径12.8~14.8cm程で、器高／口径が均を中心広く分布する。第20図11、16の环は内外面とも黒色処理、第19図20・第20図15・第21図4は内面黒色処理されてなくミガキも認められない。他は磨耗のため不明なものを除き、内面黒色処理でミガキがあるものである。底部は回転糸切りである。当類のうち特に形態が他と異なるものは第19図20のものであり、器厚が非常に薄く、口縁部が屈曲し、底部がくびれる形状を呈する。灯油痕を残すものがほとんどである。

VI類 (第21図12) 口径15.4cm前後のもので、器高／口径が均を若干下回る。当類も将来的にはV類と合わせて再吟味を要することが考えられる。内面黒色処理でミガキがあり、底部回転糸切りである。

VII類 これも以前に出土したものであり、口径が17~18cmのものである。器高／口径は均弱である。内面黒色処理でミガキがあり、底部回転糸切りである。参考資料である。<sup>(注7)</sup>

その他 (第21図15~17) 高台付环と外面底部に「虫」?と墨書きされているものがある。

## 6. 瓦

今回の調査では瓦が比較的まとまって出土したが、大部分が攪乱からで、セット関係や年代を知る資料とはなり得なかった。全て破片資料であるが、軒平瓦・軒丸瓦には瓦当の残存が良好なものが1点ずつ含まれる。出土した瓦の種類は軒平瓦・軒丸瓦・平瓦(刻印文字瓦含む)・丸瓦である。

これらの瓦は製作技法などの相違から分類することができる。なお、分類については前回の

<sup>(註8)</sup>  
燕沢遺跡の調査報告を基に、若干の修正を加えたものである。

### 軒平瓦

軒平瓦は瓦当面の文様の相違で、次のように分類することができる。

#### I類 ロクロびき重弧文軒平瓦（第27図1・2）

瓦当面にロクロによってひき出された重弧文を有するもの。重弧文の先端は丸味を持っている。額部と平瓦部凸面はロクロ調整を受けている。額部幅は約5cm程度で、断面形は長方形を呈する。凹面には緻密な布目痕が観察され、ヘラケズリが施されている。

#### IIa類 均整唐草文軒平瓦（第26図1～4）

瓦当面に均整唐草文が施され、額部に鋸歯文を持つもの。この唐草文は燕沢遺跡に特有のものである。額部は全面ナデつけた後、沈線で鋸歯文が描かれている。なお額部に縄叩きが観察されるものもある。額部幅は8cm程度で、断面形は三角形を呈する。側面はほぼ垂直にヘラケズリされている。凹面には粗い布目痕が観察される。

#### IIb類 均整唐草文軒丸瓦（第26図5）

瓦当面にIIa類と同一の均整唐草文が施されるが、額部は鋸歯文がなく、縦方向の縄叩きが施されている。額部幅は8cm程度で、断面形は三角形を呈している。凹面には緻密な布目痕が観察される。

### 軒丸瓦

軒丸瓦は瓦当面の文様の相違で、以下のように分類することができる。

#### I類 宝相華文軒丸瓦（第22図1～3）

この宝相華文は燕沢遺跡に特有のものである。瓦当面直径は18cm、厚さは1.5cm程度である。瓦当裏面は縄叩き後、ナデによるスリケシを受けている。凸面は全面ナデが施されている。凹面には布目痕が観察されるが、瓦当部との接合部分はナデによるスリケシが行われている。側面はヘラケズリによる二面の面取りが施されている。

#### II類 齒車文軒丸瓦（第22図4）

瓦当部破片一点のみの出土である。瓦当部直径は推定で19.5cm、厚さは2cm程度である。同裏面は縄叩きの後、ナデによるスリケシが行われている。

#### III類 変形蓮華文軒丸瓦（第22図4）

瓦当部の小破片一点のみの出土であるが、状態が悪く十分な観察を行うことができない。<sup>(註9)</sup>陳奥園分寺跡に類似の出土がある。

### 平瓦

平瓦は凸面の叩き目などの調整の相違により、以下のように分類することができる。

#### Ia類 格子叩き目（菱形格子）（第27図4、28図1・3・5）

凸面に菱形の格子叩き目が観察されるもので、ナデやケズリにより一部スリケシを受けているものがみられる。凹面には模様痕が観察されるものと、されないものがある。いずれにも緻密な布目痕がみられる。また側面部がヘラナデを受けているものがある。側面及び小口面はヘラケズリが行われている。

#### I b 類 格子叩き目（方形格子）（第27図3、第28図4）

凸面に長方形の格子叩き目が観察されるもの。格子の大きさに相違がみられる。凹面には緻密な布目痕が観察される。

#### I c 類 格子叩き目（菱形格子及び方形格子）（第28図2）

凸面に菱形と長方形2種類の格子叩き目が観察されるもの。凹面には緻密な布目痕がみられる。

#### II類 平行叩き目（第29図3・4、30図1・2）

凸面に平行叩き目が観察されるもの。叩き目には荒いものと細いものがある。叩き日の方向は斜方向、横方向のものがあり、方向の異なるものが重なっているものもみられる。凹面には布目痕が観察されるが、部分的にナデによるスリケシを受けているものがある。また、糸切痕のあるものもある。側面及び小口面はヘラケズリが施されている。

#### III類 ヘラケズリ（第29図2）

凸面にヘラケズリ調整が施されているもの。破片の凸面全体にケズリが及んでいるため、叩きの有無は不明である。凹面にも全面ヘラケズリが観察される。

#### IV類 繩叩き目（第30図3、31図1～3、32図1・2、33図1～3、34図1）

凸面に繩叩き目が観察されるものであるが、凹面に刻印を持つ文字瓦が含まれる。繩叩き日の方向は縦方向のものが上体を占めるが、斜方向のものもある。叩き日の太さにも差異がみられるが、文字瓦のそれは細かい。また部分的にナデによるスリケシを受けているものがある。凹面には布目痕が観察されるが、部分的にナデによるスリケシを受けているものもある。2点のみの出土であるが、凹面に「未」の刻印を持つ文字瓦がある。側面はヘラケズリによる面取りが施されており、小口面もヘラケズリを受けている。

#### V類 ロクロ調整（第29図1）

凸面にロクロ調整痕が観察されるもの。凹面には緻密な布目痕がみられる。小口面はヘラケズリが施されている。

### 丸 瓦

丸瓦は凸面の叩き日の相違により、次のように分類することができる。なお、分類の基準とした前回調査の報告ではI類として格子叩き目をあげているが、今回の調査ではこれが出土しなかったため、I類は欠番となった。

## II類 平行叩き目 (第22図6・7、23図1・2)

凸面に平行叩き目が観察されるもの。叩き目の方向には斜方向と横方向があるが、方向の違う複数の叩き目が重なっている。凹面には緻密な布目痕が観察されるが、側辺部はヘラケズリを受けている。側面及び小口面はヘラケズリである。

## III類 ナデ調整 (第23図4、24図1)

凸面にナデ調整が施され、叩き目の種類が不明であるもの。凸面全体にナデ調整を受けている。凹面には粘土合わせ目痕及び緻密な布目痕が観察され、側辺部にはヘラケズリが施されている。側面、小口面はヘラケズリである。

## IVa類 繩叩き目 (第23図3、25図1・2)

凸面に繩叩き目が観察されるもの。叩き目はナデによるスリケシを受けている。凹面には布目痕がみられ、粘土紐巻き痕が観察されるものもある。側面及び小口面はヘラケズリである。

## IVb類 繩叩き目ロクロ調整 (第24図2・3)

凸面の繩叩き目が、ロクロ調整によりスリケシされたもの。凹面には布目痕が観察され、粘土紐巻き痕がみられるものがある。側面及び小口面はヘラケズリされている。

なお今回出土した丸瓦破片は比較的小さいものが多く、その形状からは無段瓦、有段瓦の区別のつきにくい例が大半であった。しかし、これまでの本遺跡の出土例から、II類は無段瓦、III類は有段瓦と、一応の区分ができるものと考えられる。

## 7. その他の遺物 (第35図)

その他の遺物としては鉄製品(1)・銅製品(2)・土製品(3、4)・鉄滓がある。1は鉢であり、墓壙出土である。2はSD1溝跡出土のものであり、どのようなものの一部なのか不明である。3は脚になるものであろうか。4は有孔円盤状で不明である。鉄滓は楕円形で搅乱4出土である。

## VII.まとめと若干の考察

1. 調査地点の状況 当地点において発見された遺構は削平がひどく、S11・2住居跡ではほぼ床面だけの検出という状況に近く、S13竪穴遺構においても、一辺が削平により途中で消滅している。しかるにSD1溝を除き出土遺物の量も非常に少なく、小破片である。これは、当地斜面を段々畑とする際に相当に切り土したらしく、旧地権者もかつてブルトーザを使用したと証言している。また搅乱5については、畑の東側に溝を掘り、耕作時に出てきた瓦等を埋めたものとのことであった。

南区調査区断面を見ても、I-1層が地山直上にあるが、発見遺構の立ち上がりがないくらい

い削り込まれたところに堆積していることより、畑造成時の移動層と考えられる。この層と類似する層は、西区南端寄りにも存在するが、その層中から化学製品である荷造り紐が発見されたことも、そのことを物語るものと思われる。

南区中央付近で発見された墓壙の壁石が抜き取られ、また残存しているものも内傾していることは、そのことと関連あるものと考えられる。

当調査区において、かろうじて地山面の削平が免れたところは、南区西半のⅡ層が存在しているところだけである。しかしながら、その上のⅠ・Ⅱ層の積み土については、いつのものか不明である。この積み土からは縄文土器片が若干出るだけである。またここには、かつて塚状の高まりはなかったということである。

2. 出土遺物の年代観 出土遺物はこれまで記述したとおり撿乱出土のものが大部分であり、その大部分は瓦と土師器環で占められる。

瓦はクロロ挽き重弧文軒平瓦に代表されるような奈良時代に該当できるものは、全量からみれば若干と言つてよい。また、土師器・須恵器に奈良時代と考えられるものがないことより、当遺跡との直接の関係については、疑問を持たざるを得ない。また、軒平・軒丸瓦のセット関係については、今後の調査例を待たい。

土師器は平安時代のものと考えられるが、撿乱からの出土が多く、そのセット関係は不明である。内面黒色処理、体部横位ミガキ、底部放射状ミガキのものが過半あるが、小形の器形や黒色処理がされていないもの、ミガキの見られないもの、ミガキがあつても雑なものがあること、割合に残りの良かったS D 1溝跡堆積土中に10世紀前半に降下したと言われる火山灰の存在が少しも見られなかつたことより、10世紀後半以降のものと考えられる。<sup>(註10)</sup>

当遺跡北側を流れる七北川上流約3.5kmに鹿島遺跡・竹之内遺跡がある。ここの出土遺物で、須恵器の占める割合が低いのは当遺跡調査と同傾向であるが、B群土器と称されるものの主体が赤焼土器という点、回転糸切り無調整、高台付环の高台も高く「八」字形に開くもののか断面三角形を呈し、その高さもさほどでないものが多い点で異なるようである。土師器環の法量を今回の第13図と比較すると、A・B群土器ともV・VI類の範疇に入る。またB群の赤焼土器の小皿はI類a・II類としたものと類似する値となり、器高／口径が以前後に集中する。同群の赤焼土器の环はほぼIV～VI類の範疇にばらつく。鹿島遺跡A群土器は9世紀中～10世紀前葉に、B群土器が11世紀前半に位置付けられている。<sup>(註11)</sup>

撿乱中出土のものが多いとはいゝ、赤焼土器といえるものなく、I・II・III類の环の一部が鹿島遺跡出土の赤焼土器の小皿の法量に近似するものもあること、III類とした第19図13・14・16・17が、いわゆる土師器環の胎土・色調・調整からはずれた存在であることなどから考え、今回出土した土師器環の年代は10世紀後半～11世紀初頭にかけてのものと考えておきたい。

3. 遺物の特徴 土師器壺の大部分が灯油痕を残す。灯明皿ないし、灯明皿に転用したものが多いことを物語っている。墨書「諸院」とともに、遺跡の性格を検討するうえで重要なポイントとなりうると考えられるので、今後の調査でも注意してみていく必要がある。

4. 発見遺構の年代観 SK 1.上坑は縄文早期～前期のものと思われる。弥生遺構は S 1.3 穴式遺構で、十三塚式期と思われる。他の SD 1 滝跡、S 1.1・2 住居跡、その他柱穴などは平安時代のものと思われ、その年代観は土師器壺から10世紀後半～11世紀初頭にかけてのものと見られるが、これら遺構から I・II・III 類のものが確認されていないので、直接的には10世紀後半の遺構としておきたい。また墓壇については、土師器等の遺物がなく鉛だけなので、古墳時代から平安時代と広く年代を設定しておきたい。しかし、全出土遺物から見れば平安時代に力点をおきたいところである。

No.	直径	深さ	地 種 土	No.	直径	深さ	地 種 土
1	40	20	10YR 4/8 單褐色シルト	11	29	10	10YR 4/8 單褐色粘質シルト
2	46	31	10YR 4/8 單褐色シルト	12	26	25	7.5YR 4/8 單褐色粘質シルト
3	37	19	10YR 4/8 單褐色シルト	13	43	11	7.5YR 4/8 單褐色粘質シルト
4	38	10	10YR 4/8 單褐色シルト	14	67	22	10YR 4/8 單褐色シルト
5	36	13	10YR 4/8 單褐色シルト	15	18	15	10YR 4/8 單褐色シルト
6	25	11	10YR 4/8 單褐色粘質シルト	16	14	8	10YR 4/8 單褐色粘質シルト
7	39	18	10YR 4/8 單褐色粘質シルト	17	30	20	10YR 4/8 單褐色粘質シルト
8	25	11	10YR 4/8 單褐色粘質シルト	18	20	15	7.5YR 4/8 單褐色粘質シルト
9	32	34	10YR 4/8 單褐色シルト	19	27	18	7.5YR 4/8 單褐色粘質シルト
10	20	11	10YR 4/8 單褐色シルト	20	24	18	7.5YR 4/8 單褐色粘質シルト

表2 ピット註記表(単位cm)

## 本文 註記

註1. 石山茂作「仏教の初期文化」岩波講座『日本歴史』1934

伊東信雄「燕澤古瓦出土地」『仙台市史3』1950

・「燕沢古瓦出土地跡」『仙台の文化財』宝文堂1970

註2. 渡部弘美「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第39集・1982

註3. 渡部弘美・佐藤裕「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第62集・1984

註4. 前註2に同じ

註5～8. 前註3に同じ

註9. 伊東信雄他「陸奥国分寺跡」河北文化事業团・1961

工藤哲司「史跡陸奥国分寺跡」仙台市文化財調査報告書第27集・1981

東北大学文学部「考古学資料開録2」1982

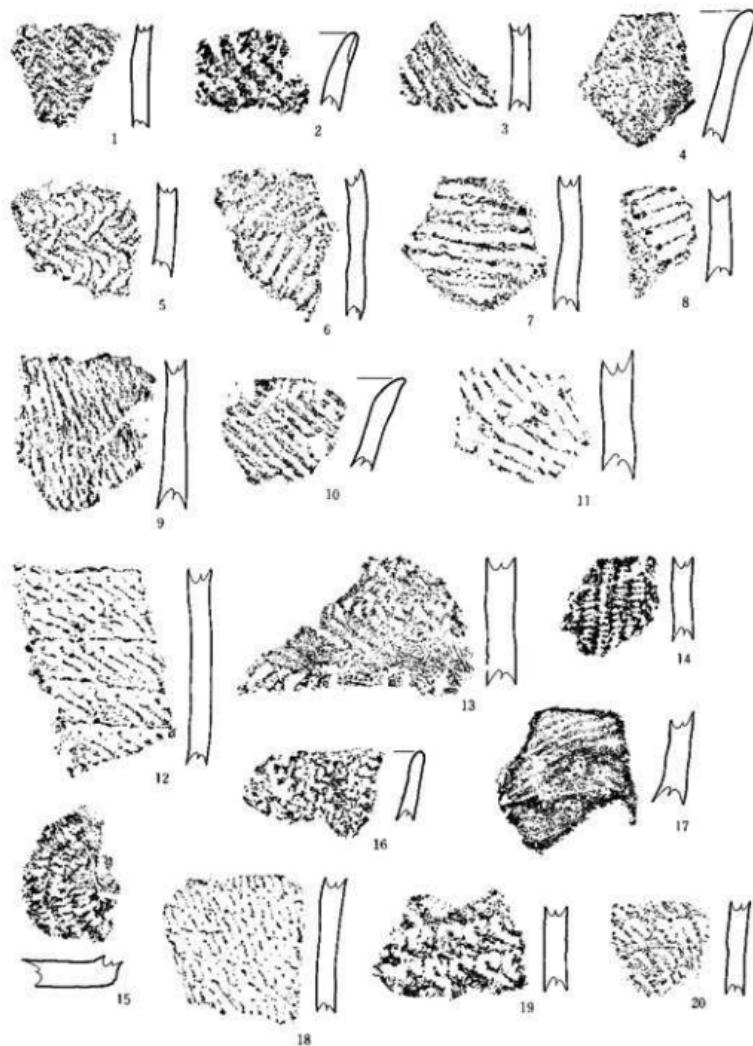
註10. 宮城県教育委員会「鹿島遺跡・竹之内遺跡」宮城県文化財調査報告書第101集・1984

註11. 赤焼土器には入れなかったが、第19回9・10・11・15・20、20回15、21回4・10の資料には黒色処理、ミ

ガキとも觀察されないことに注意しておきたい。

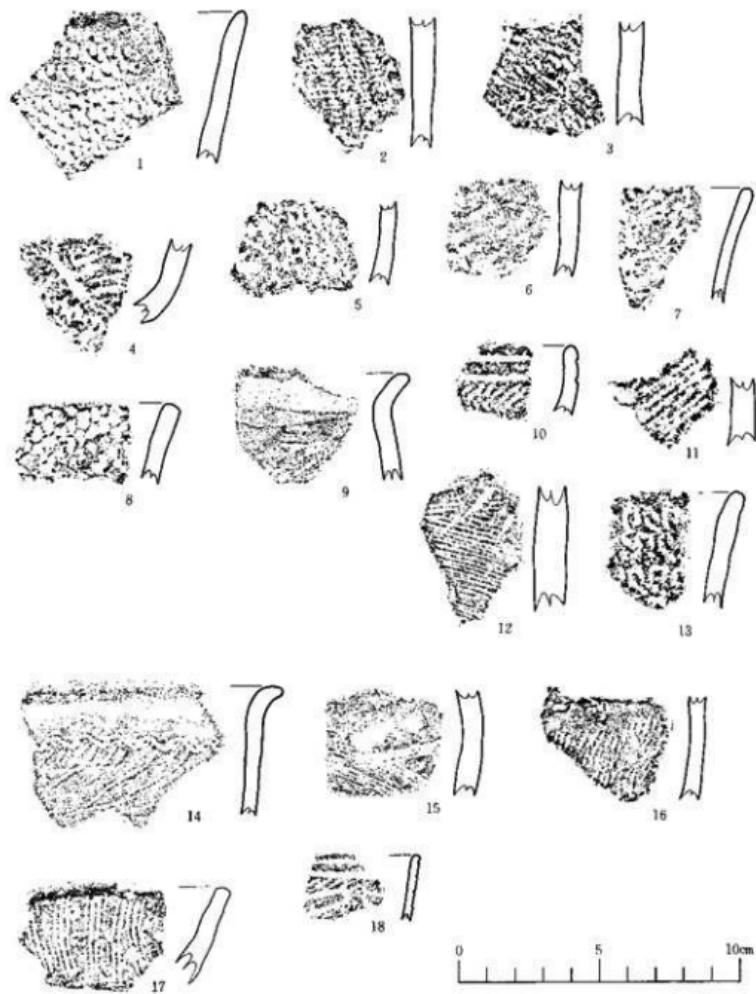
## 引用・参考文献

- 石田茂作「仏教の初期文化」岩波講座「日本歴史」1934
- 石田茂作監修「東北古瓦岡録」雄山閣・1974
- 伊東信雄「燕沢古瓦出土地」『仙台市史3』1950
- 「燕沢古瓦出土遺跡」「仙台の文化財」宝文堂・1970
- 伊東信雄他「陸奥国分寺跡」河北文化事業団・1961
- 仙台市教育委員会「史跡陸奥国分寺跡」仙台市文化財調査報告書第27集・1981
- 「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第39集・1982
- 「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第62集・1984
- 「史跡陸奥国分寺跡」仙台市文化財調査報告書第63集・1984
- 宮城県教育委員会「鹿島遺跡・竹之内遺跡」宮城県文化財調査報告書第101集・1984
- 東北大文学部「考古学資料図録2」1982
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡行政跡（岡録編）」1980
- 「多賀城跡行政跡（本文編）」1982
- 宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要Ⅰ」1974
- 「研究紀要Ⅱ」1975
- 「研究紀要V」1978
- 福島県教育委員会「開和久遺跡」1985

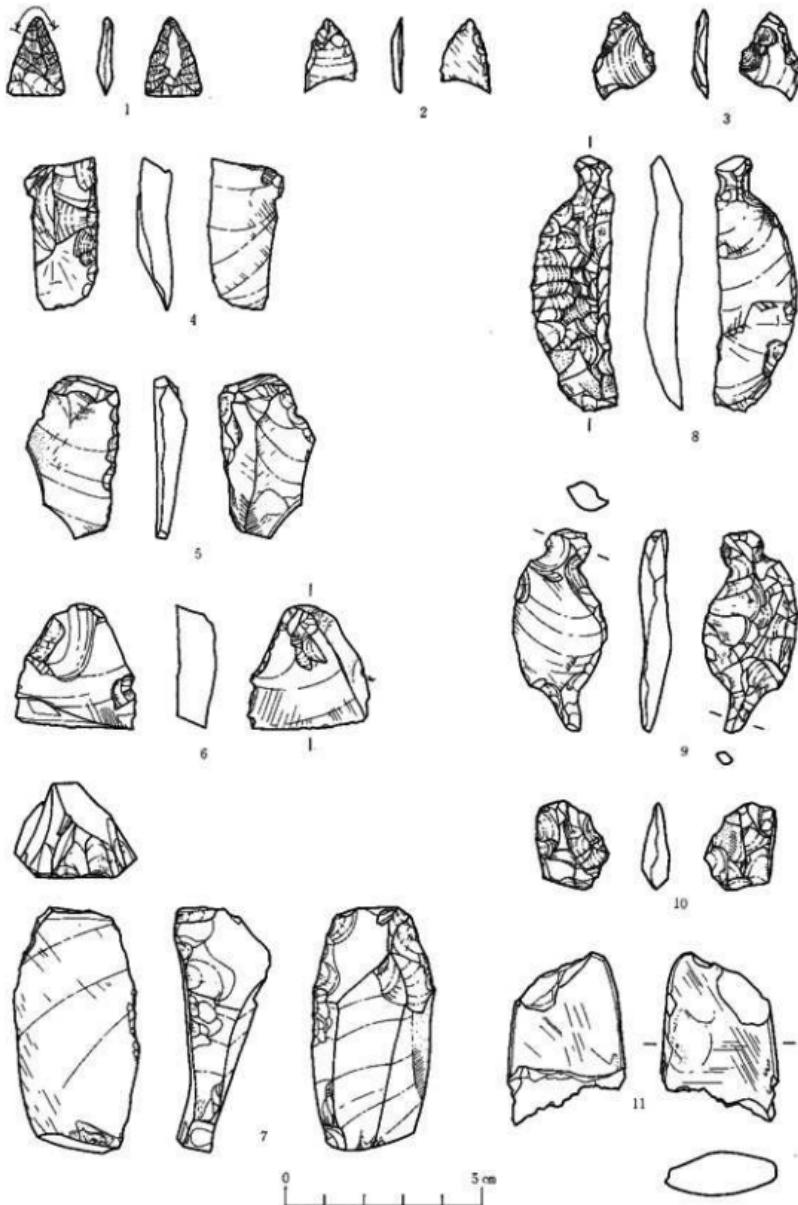


0 5 10cm

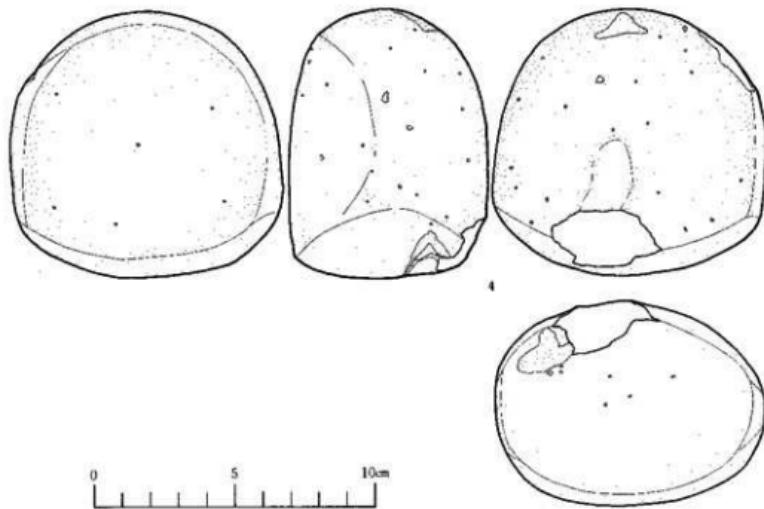
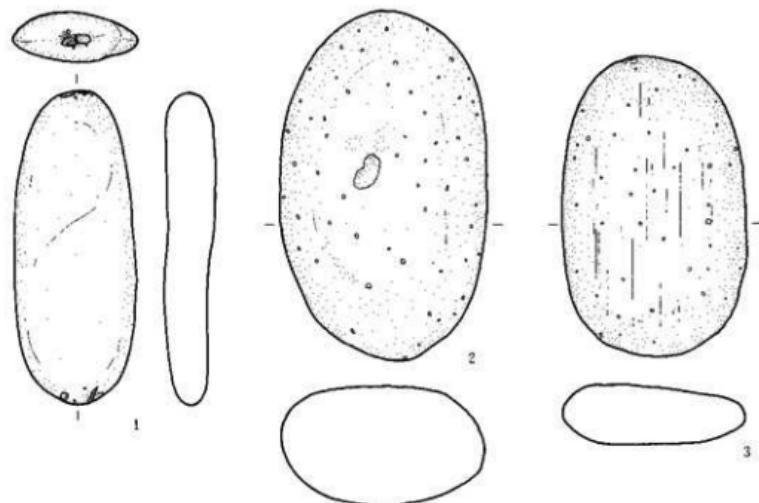
第14図 繩文土器拓影



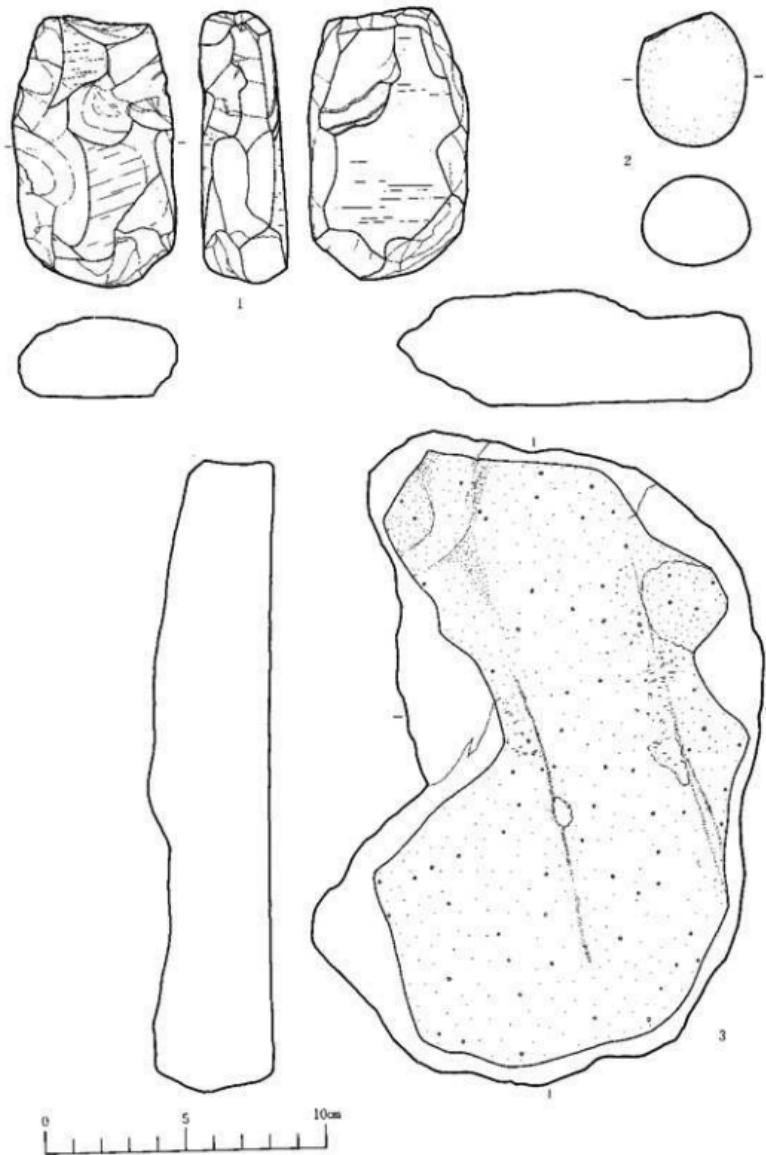
第15図 繩文土器、弥生土器拓影



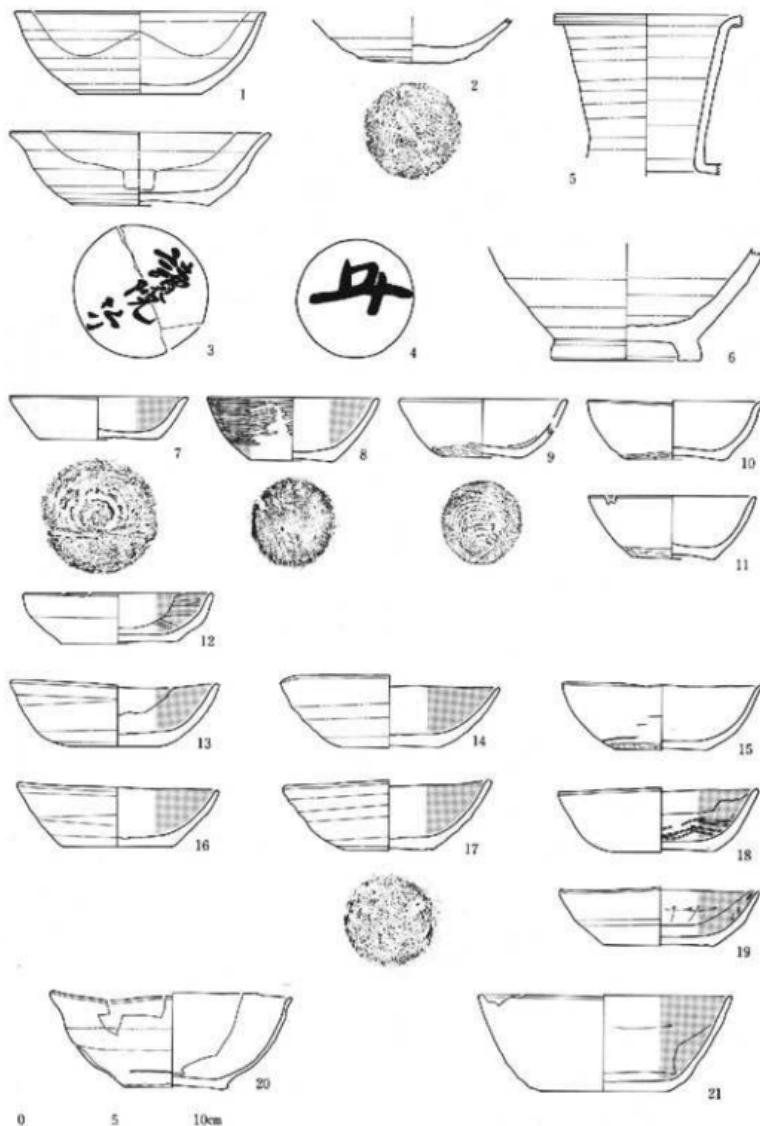
第16図 石器 I



第17図 石器II

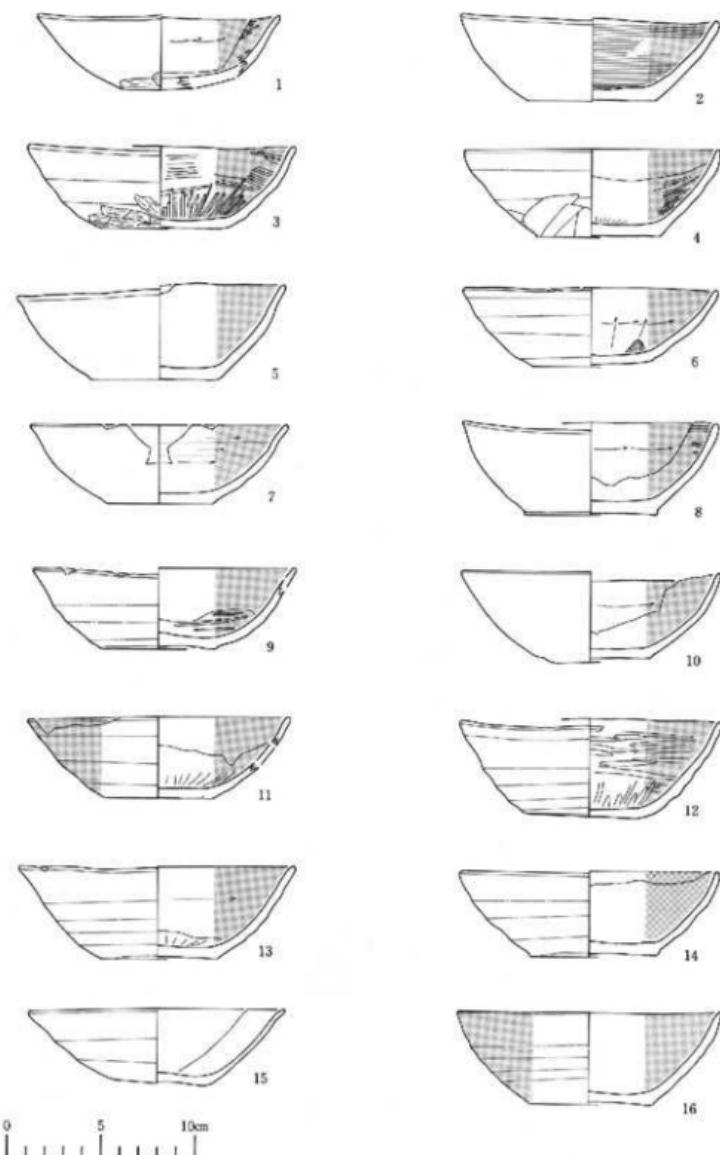


第18図 石器Ⅲ

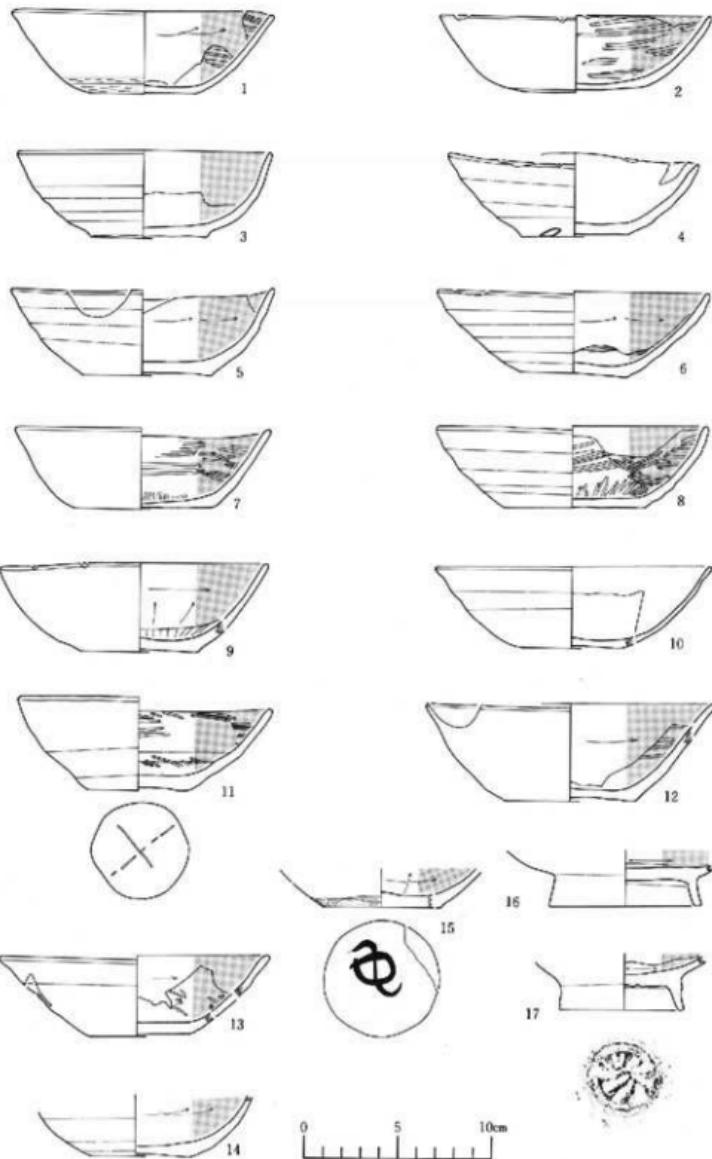


※スクリントーンは黒色処理を示す。

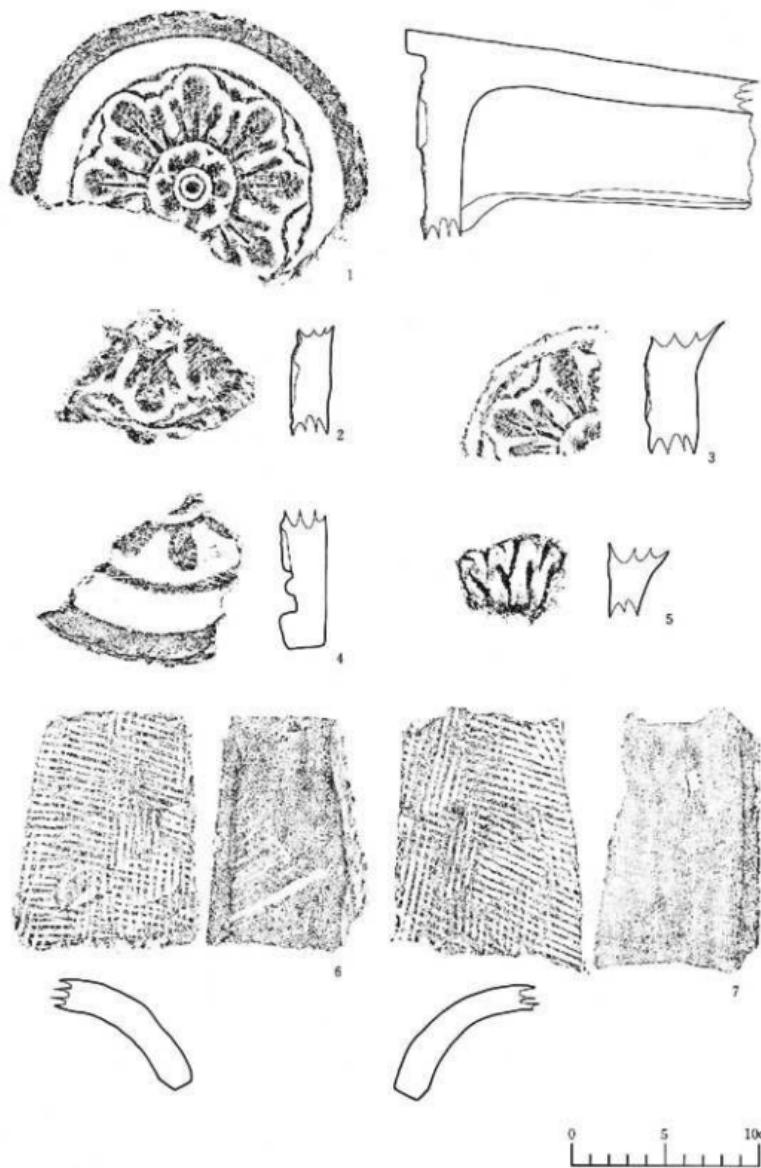
第19図 須恵器、土師器坯Ⅰ



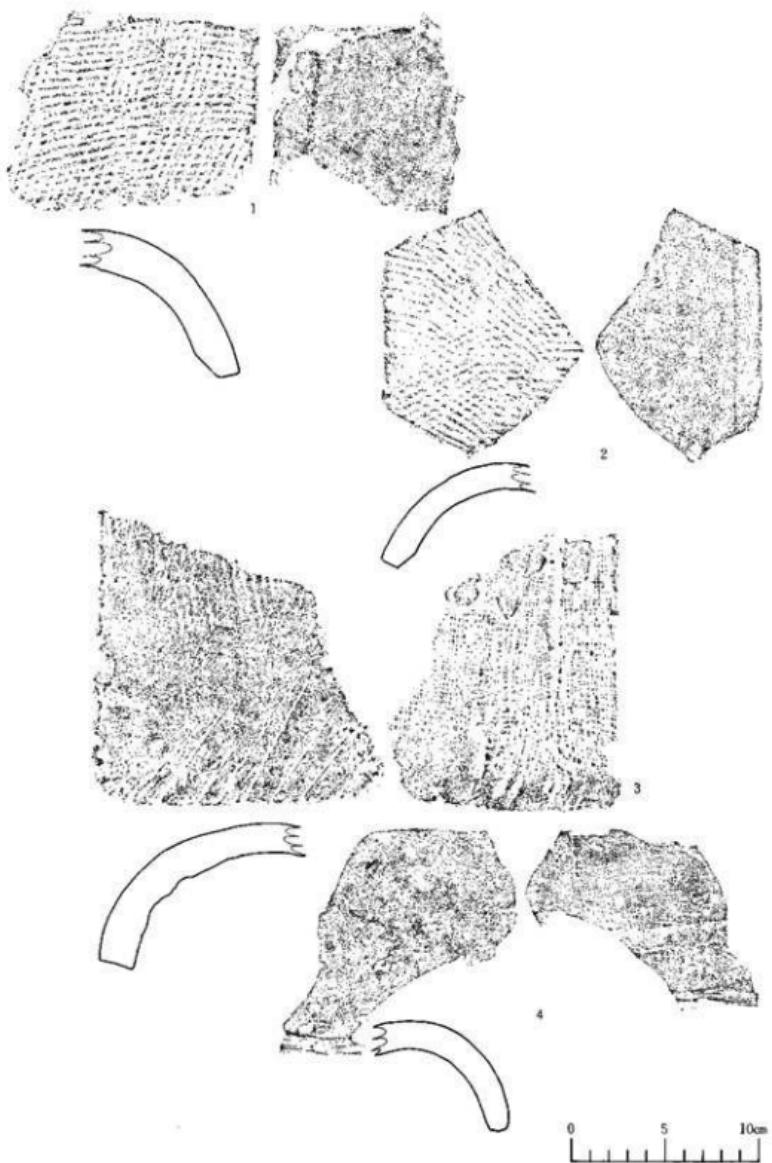
第20図 土師器壊Ⅱ



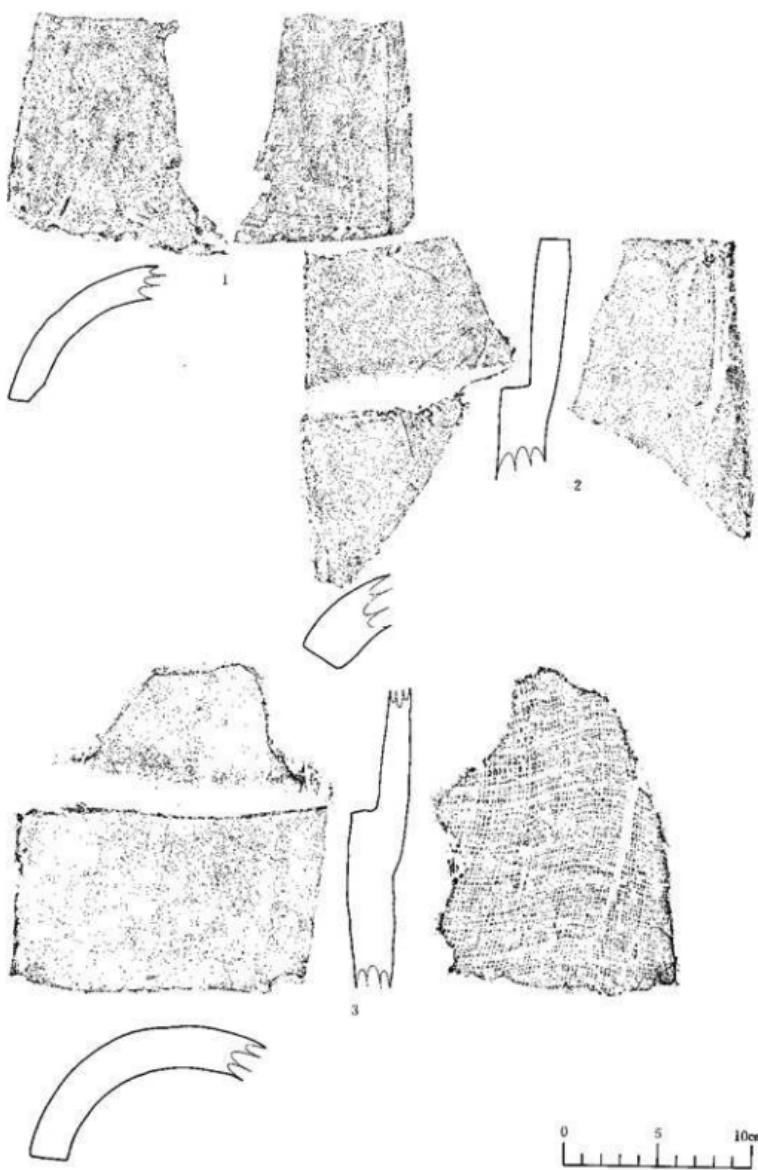
第21図 土師器壙Ⅲ



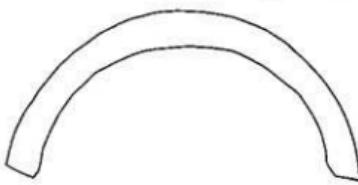
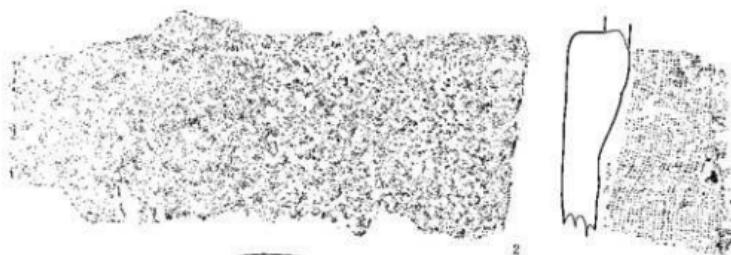
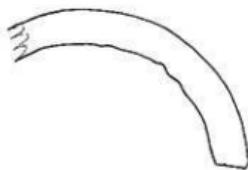
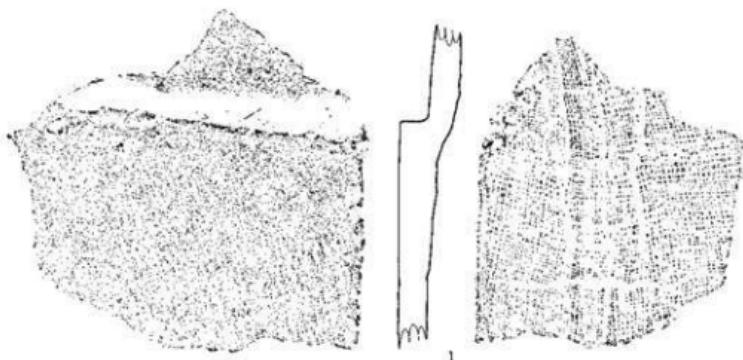
第22図 瓦 I



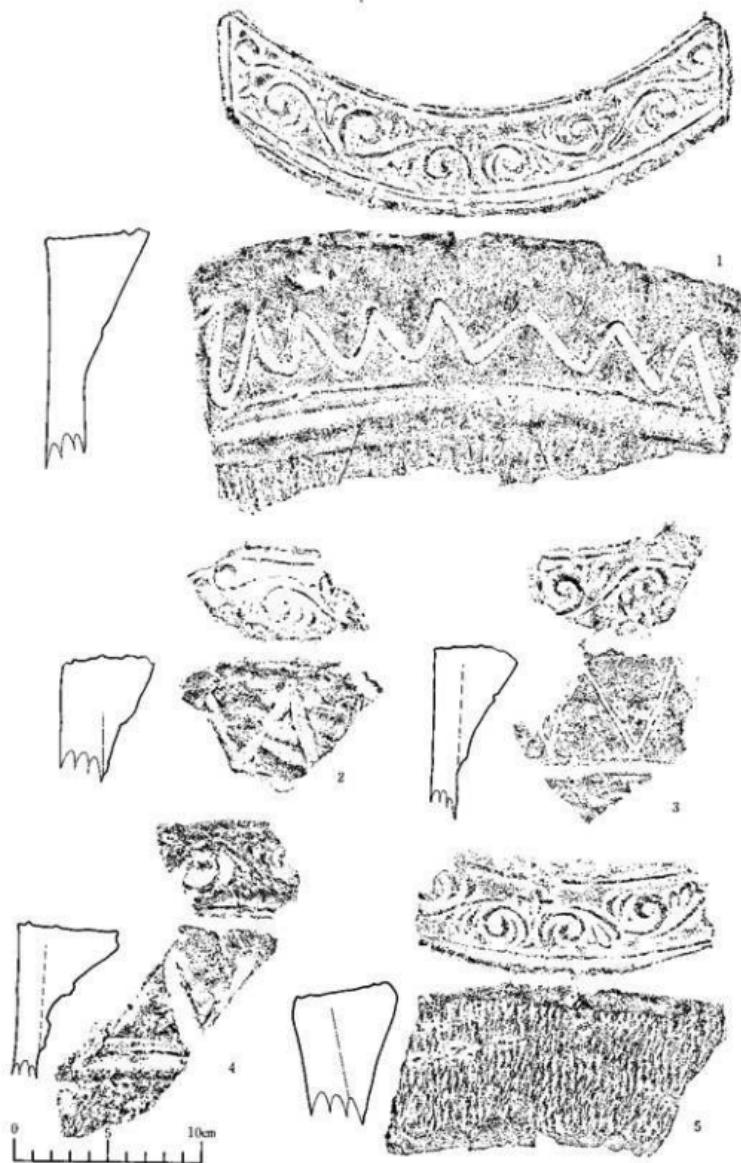
第23図 瓦II



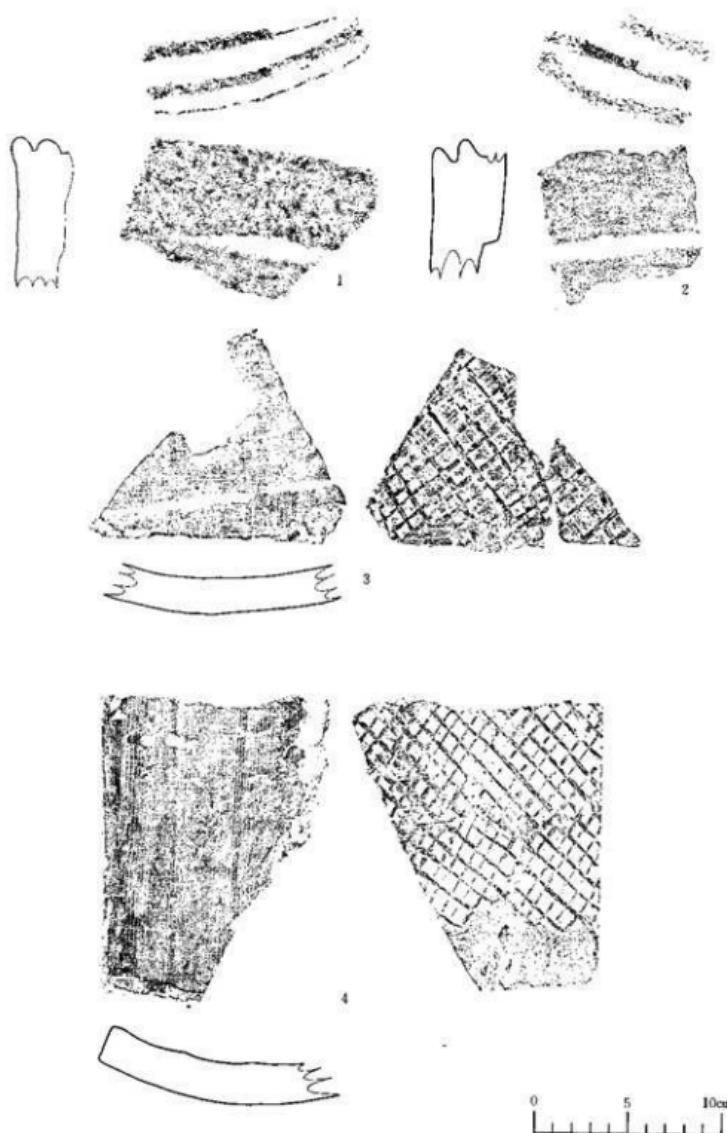
第24図 瓦III



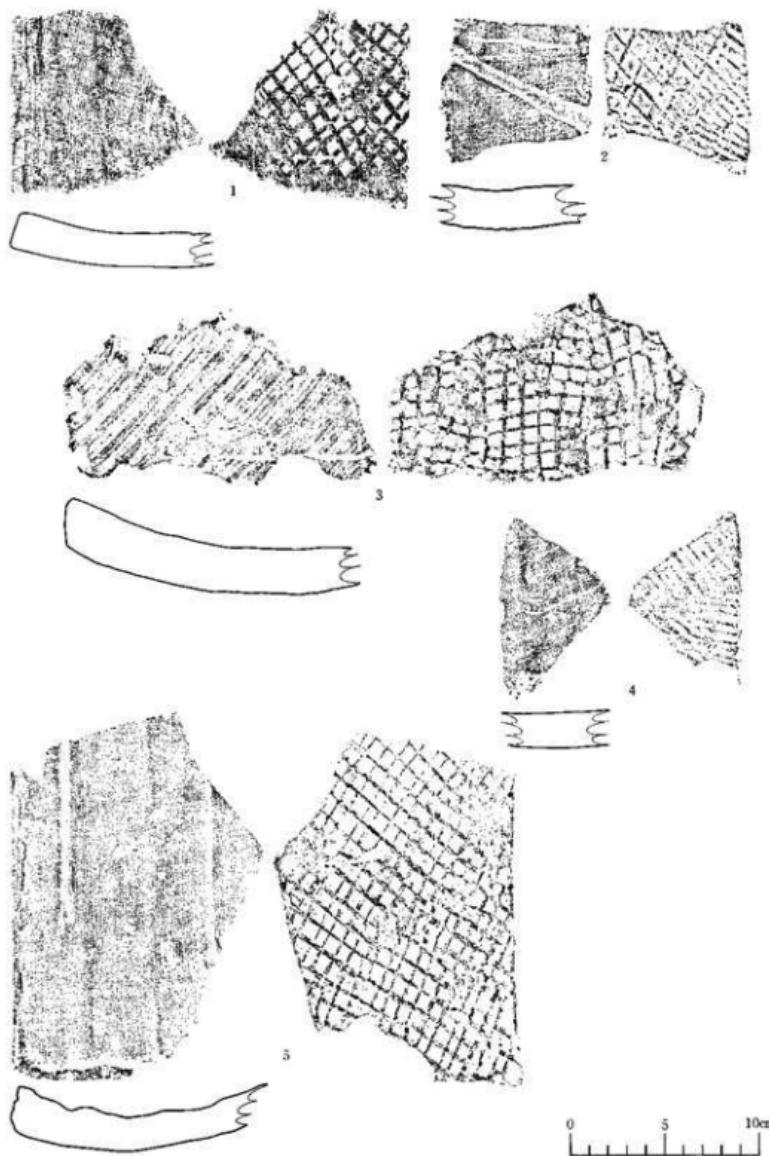
第25図 瓦 IV



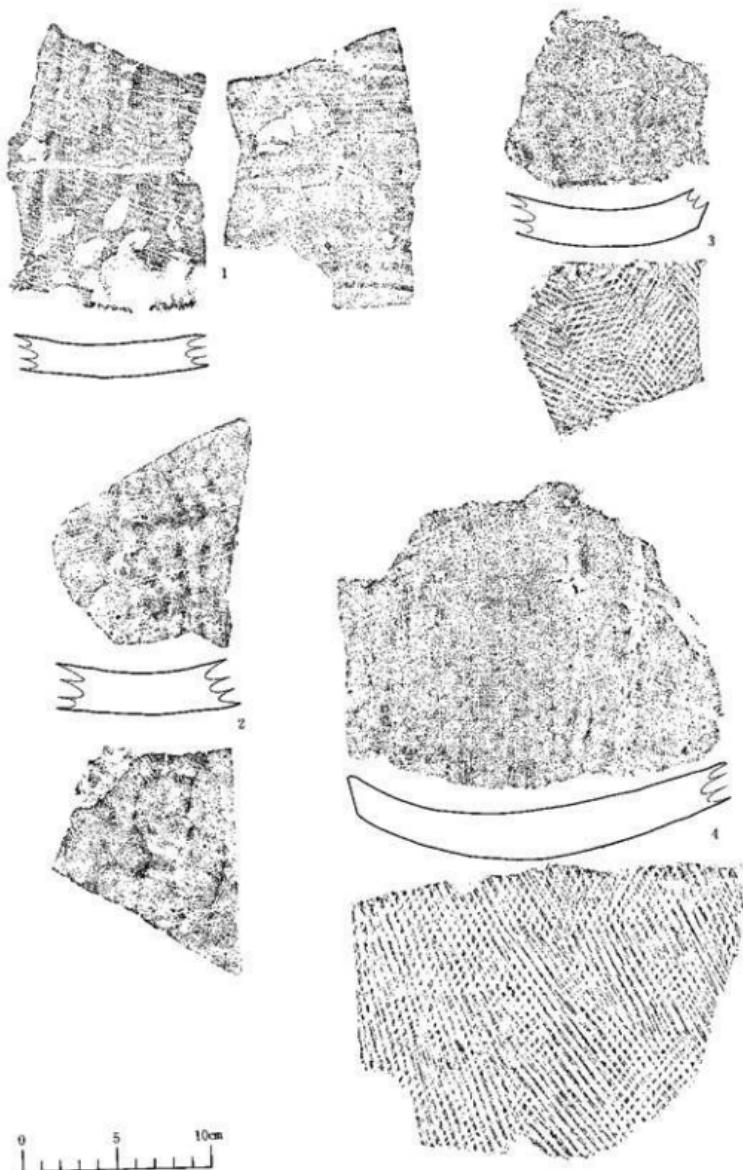
第26図 瓦V



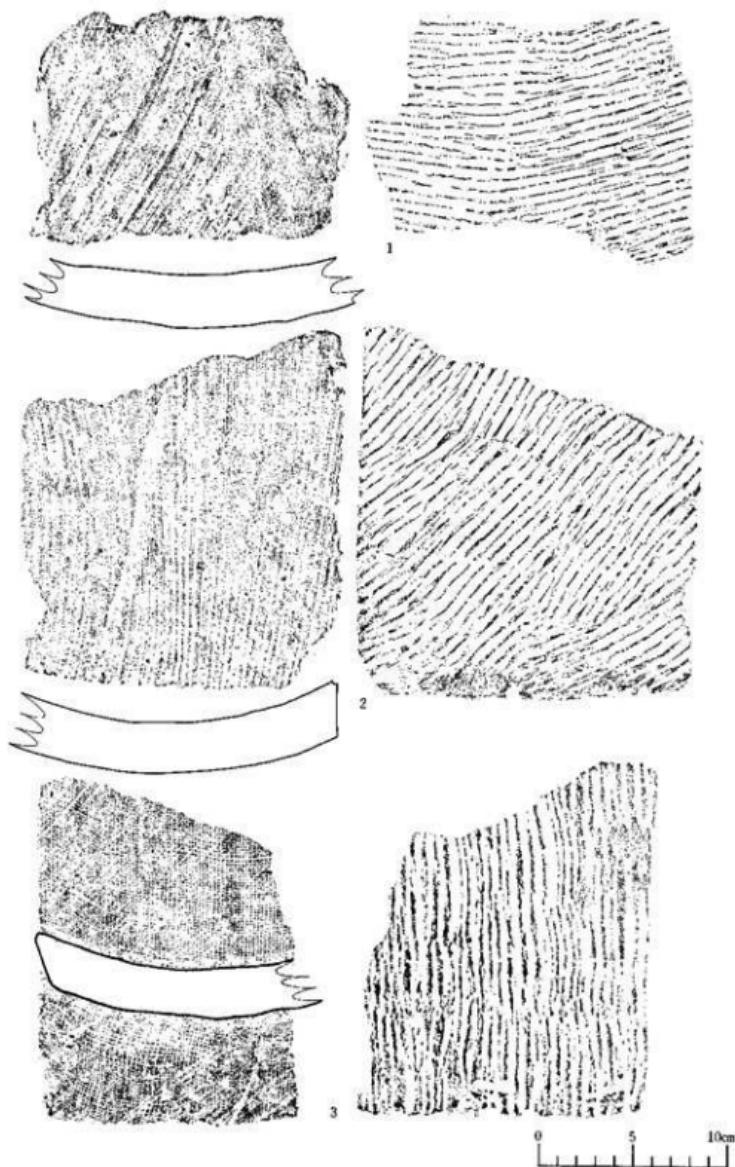
第27図 瓦 VI



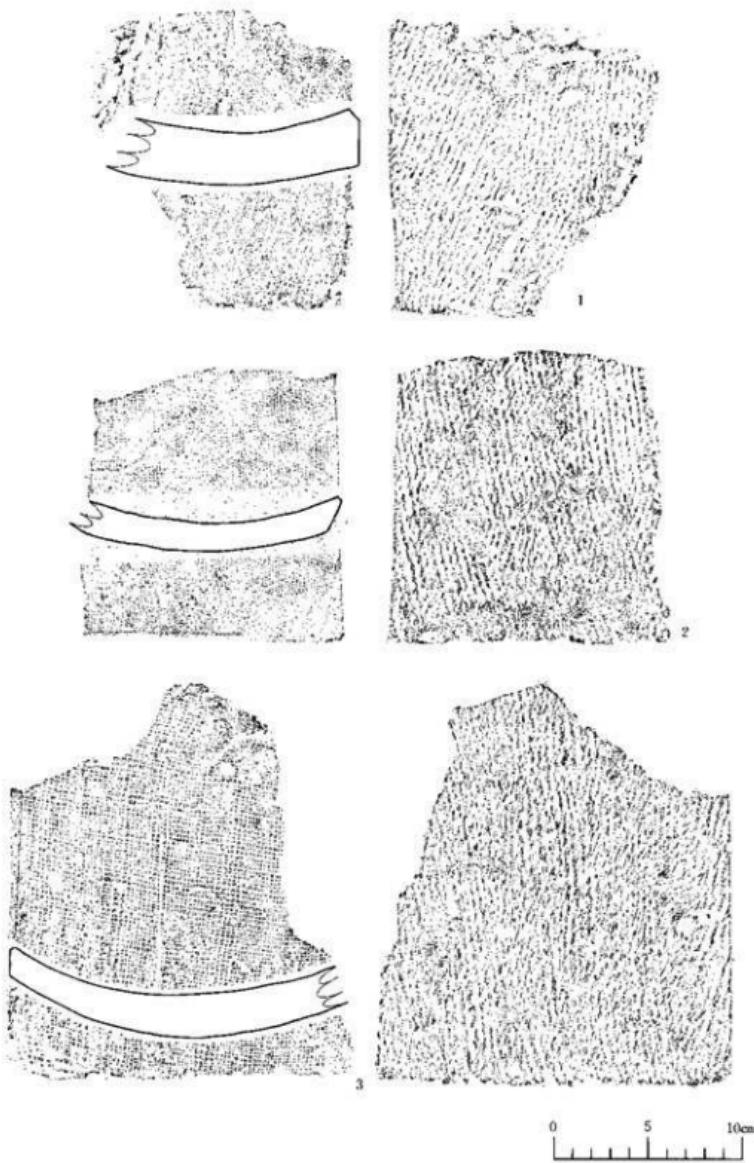
第28図 瓦VII



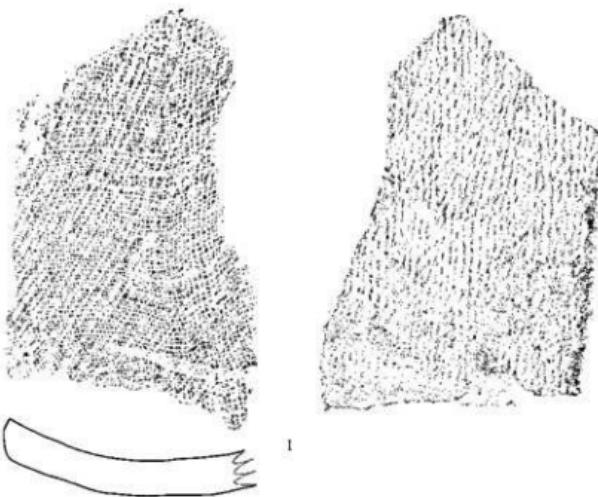
第29図 瓦面



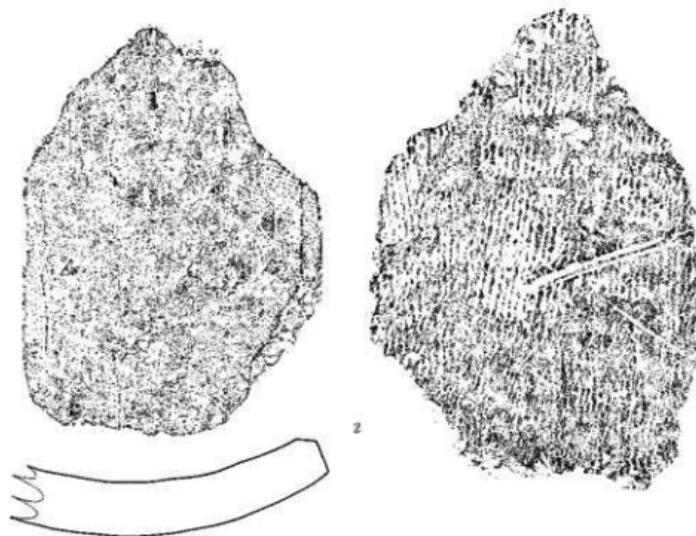
第30図 瓦Ⅸ



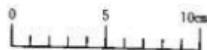
第31図 瓦X



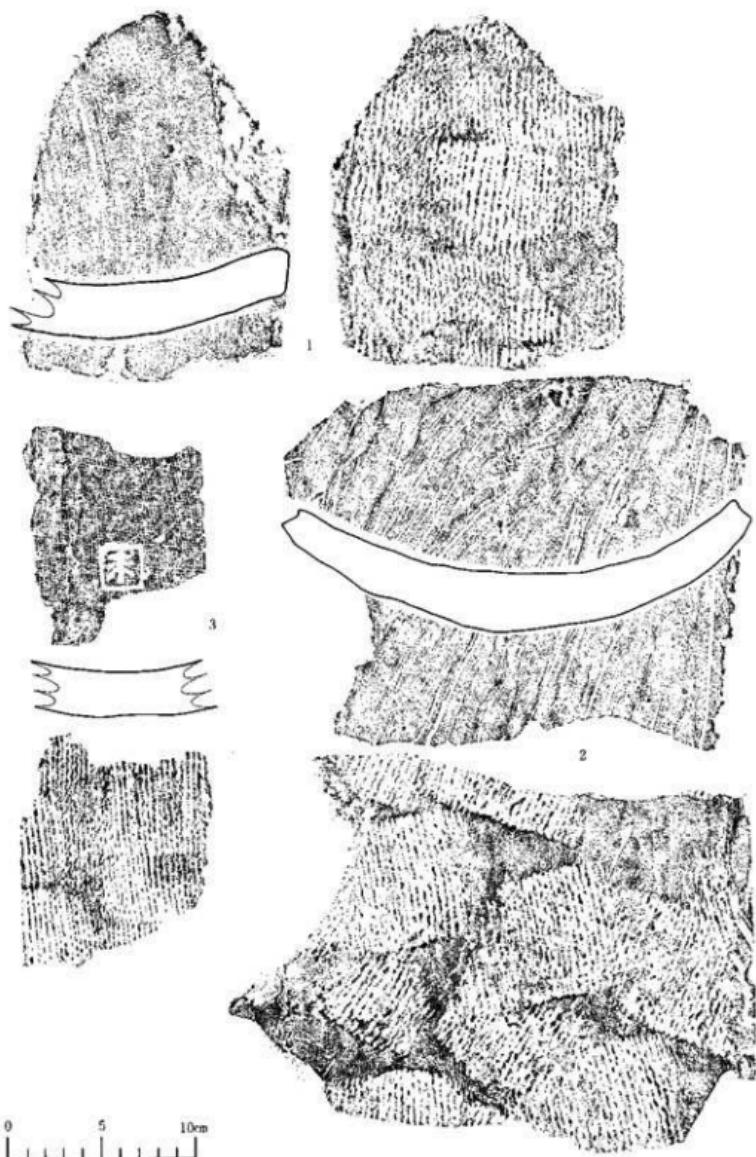
1



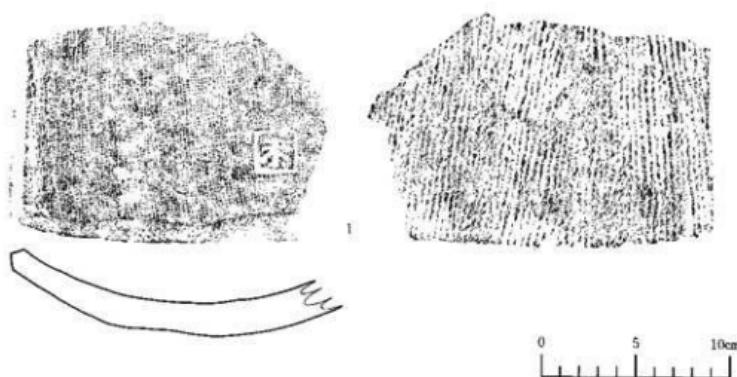
2



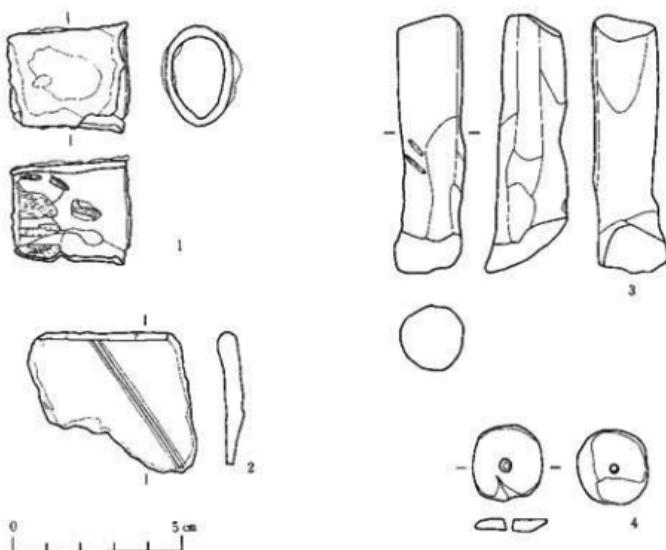
第32図 瓦 XI



第33図 瓦



第34図 瓦 X



第35図 その他の出土遺物

表3 出土遺物観察表

図版 番号	種類 (分類)	特徴	出土地区 遺構・別段	写真図版 登録番号
14-1	縄文土器 (I-2-c)	羽状縦文、織維多く含む 早期末～前期初頭	南区 S I I	10-3 A-1
14-2	” (I-1-a)	単線縦文と斜め目のある口縁部片、織維多く含む 早期末～前期初頭	南区 基壇	A-2
14-3	” (I-2-a)	単線縦文、織維含む 早期末～前期初頭	”	A-3
14-4	” (I-1-e)	ループ文、口縁部片、織維含む 早期末～前期初頭	”	A-4
14-5	” (I-2-c)	羽状縦文、織維含む 早期末～前期初頭	”	10-4 A-5
14-6	” (I-2-a)	単線縦文、織維多く含む 早期末～前期初頭	南区 倒木塀	10-7 A-6
14-7	” (I-2-a)	単線縦文、織維多く含む 早期末～前期初頭	”	10-8 A-7
14-8	” (I-2-a)	単線縦文、織維含む 早期末～前期初頭	”	A-8
14-9	” (I-2-d)	燃余文、織維多く含む 早期	南区 II層	10-1 A-9
14-10	” (I-1-d)	燃余文、口縁部片、織維多く含む 早期	”	10-2 A-10
14-11	” (I-2-d)	燃余文、織維含む 早期	”	A-11
14-12	” (I-2-c)	ループ文、織維含む 前期	”	10-5 A-12
14-13	” (I-2-c)	羽状縦文、織維含む 早期末～前期初頭	”	A-13
14-14	” (I-2-a)	単線縦文、織維含む 早期末～前期初頭	”	A-14
14-15	” (I-3-g)	爪形文、底部片、織維含む 早期末～前期初頭、往島類似	”	A-15
14-16	” (I-1-f)	組み紐？、口縁部片、織維多く含む 早期末～前期初頭	南区 II層	10-10 A-16
14-17	” (I-3-h)	条痕文、底部片 早期	南区 探石1	A-17
14-18	” (I-2-e)	ループ文、織維含む 前期初頭	”	A-18
14-19	” (I-2-e)	ループ文、織維含む 前期初頭	”	A-19
14-20	” (I-2-c)	ループ文、織維多く含む 早期末～前期初頭	”	A-20
15-1	” (I-1-c)	ループ文、口縁部片、織維含む 前期初頭	”	10-6 A-21
15-2	” (I-2-c)	羽状縦文、織維多く含む 早期末～前期初頭	”	A-22
15-3	” (I-2-a)	単線縦文、織維含む 早期末～前期初頭	”	A-23

図版番号	種類(分類)	特徴	出土地区 遺構・層位	写真区段 登録番号
15-4	縄文土器 (I-2-a)	手筋縄文、織維多く含む 中期末～前期初頭	南区	
15-5	*	単筋縄文、織維含む 中期末～前期初頭	発掘1	A-24
15-6	*	単筋縄文、織維含む 中期末～前期初頭	*	A-25
15-7	(I-2-a)	単筋縄文、織維含む 中期末～前期初頭	*	10-9
15-8	*	複筋縄文、口縁部片、織維含む 中期末～前期初頭	*	A-26
15-9	(II-1)	口縁部横位ナギ、L R 縄文 中期～後期？	*	A-27
15-10	(II-2-i)	沈縄文+L R 縄文 後期以降	表 掘	10-11
15-11	(I-2-d)	燃糸文、織維多く含む 早期末～前期初頭	*	A-30
15-12	(II-2-d)	燃糸文 中期～後期	*	A-31
15-13	(I-2-e)	ループ文、織維・白色糸状物質含む 前期	*	A-32
15-14	弥生土器	口沿部にL R 縄文の痕跡、頸部は横位ナギ、その下に被縄文十付加条縄文 十三塙式	西区	10-16
15-15	*	3本一端の沈縄が連弧を描く 十三塙式	S I 3	B-1
15-16	*	口縁部ナギ・刺突文+L R 縄文 糸形文か？	南区	10-15
15-17	*	折り返し口縁か？ R L の帯状縄文 天王山式？	南区	B-2
15-18	*	L R 縄文？ 沈縄？ 織形？ L R 縄文を充満か？ 糸形文か？	発掘1	10-14
16-1	石製品	石鎚、先端部磨耗しており、ドリルに転用か？	西区	B-5
16-2	*	石鎚、未成品	南区	10-18
16-3	*	石鎚、未成品、チャート	S I 3	K-19
16-4	*	スクレーパー	南区	K-17
16-5	*	スクレーパー	*	10-22
16-6	*	スクレーパー、2重バティナ	南区	K-13
16-7	*	エンドスクレーパー	pit 1	10-23
16-8	*	石器	南区	K-11
			II期	10-24
			*	10-10
			*	10-25
				K-15

区 番 号	版 号	種 類 (分別)	特 徴	量 (単位: cm)	出土地区 遺構・層位	写真回数 管轄番号
16-9		石製品	石錐		南区 階段・層位	10-26 K-14
16-10	*		不定形石器、木痕品		南区 墓域	10-17 K-16
16-11	*		石斧		南区 表探	K-9
17-1		磨石器	敲打痕のある磨石器		南区 擾乱1	10-30 K-7
17-2	*		磨石 1ヶ所凹みあり		*	10-33 K-2
17-3	*		磨石		*	10-34 K-1
17-4	*		磨石		南区 表探	10-28 K-5
18-1	*		磨石 打撃痕 敲打痕あり		南区 SK1	10-32 K-6
18-2	*		磨石 全面磨耗している		南区 SX1	10-27 K-4
18-3		石製品	石錐		西区 SI3	10-31 K-20
19-1		須恵器 壺	内面-ロクロ調整、灯油痕付着 外面-ロクロ調整 深部-回転糸切り 口径 13.3 底径 6.6 器高 4.4		南区 擾乱2	5-8 E-12
19-2	*		内面-ロクロ調整、灯油痕付着 外面-ロクロ調整 底面-回転糸切り 底径 4.4		南区 SD1	E-22
19-3	*		内面-ロクロ調整、灯油痕付着 外面-ロクロ調整 底面-手持ちヘラ削り、墨書きあり「謙院」 口径 13.8 底径 7.2 器高 3.9		南区 擾乱2	5-6 E-11
19-4	*		内面-ロクロ調整 底面-回転糸切り、墨書きあり「叶」? 底径 6.2		南区 J-1層	5-7 E-3
19-5		須恵器 壺	内面-ロクロ調整 外面-ロクロ調整 口径 10.0		南区 擾乱1	5-10 E-5
19-6	*		内面-ロクロ調整 外面-ロクロ調整 底径 8.0		南区 擾乱2	5-18 E-14
19-7		土師器 壺 (I-a)	内面-黒色処理、灯油痕のため調整不明 外面-口縁部に灯油痕付着、磨耗 底面-回転ヘラ削り 口径 9.5 底径 6.3 器高 2.25 色調 淡黄褐色		南区 擾乱3	4-1 D-34
19-8	*		内面-褐色処理 外面-ロクロ調整、黒色処理 口縁-全体-横抜ミガキ 底面-回転ヘラ削り 口径 9.2 底径 4.4 器高 3.3 色調 淡黄色		*	4-2 D-36
19-9	*		内面-ミガキなし 口縁部に灯油痕付着 外面-ロクロ調整 口縁部に灯油痕付着 底部に手持ちヘラ削り 底面-回転糸切り 口径 9.0 底径 4.4 器高 3.0 色調 ぶい黄褐色		*	D-40

図 番	版 号	種 類 (分類)	特 徴	(単位: cm)	出土地区 遺物・削位	写真回数 管経番号
19-10		土師器 壺 (I-b)	内面一灯油痕付着、ミガキなし 外面一ロクロ調整 底部に手持ちヘラ削り 底面一回転糸切り 口径 9.3 底径 5.0 高さ 2.95 色調 淡黄色		南区	4-3
19-11	*		内面一部に灯油痕付着、ミガキなし 外面一ロクロ調整 底部に手持ちヘラ削り 底面一回転糸切り		*	D-39
19-12	*	(I-b)	II径 8.8 底径 4.3 高さ 3.2 色調 淡黄褐色			D-41
19-13	*	(II)	内面一黑色處理、灯油痕若干付着 口縁～体部一横位ミガキ 外面一ロクロ調整 底面一回転糸切り 口径 10.15 底径 6.0 高さ 2.65 色調 淡黄褐色		南区	D-17
19-14	*	(III)	内面一黑色處理、ミガキ痕なし 外面一ロクロ調整 底面一回転糸切り 口径 11.1 底径 4.8 高さ 3.2 色調 淡灰色 脱土に砂が多量、白色針状物質混入		*	D-25
19-15	*	(IV)	内面一黑色處理、ミガキ等の調整痕見られず、灯油痕付着 外面一底部に手持ちヘラ削り 底面一回転糸切り 口径 10.6 底径 4.8 高さ 3.4 色調 灰白色		*	4-4
19-16	*	(V)	内面一黑色處理、未調整、灯油痕付着 外面一ロクロ調整 底面一回転糸切り 口径 10.7 底径 6.0 高さ 3.15 色調 二つない褐色 脱土に砂が多量、白色針状物質混入		南区	D-23
19-17	*	(VI)	内面一黑色處理、本調整 外面一ロクロ調整 底面一不明瞭だが回転糸切りと思われる 口径 11.15 底径 4.7 高さ 3.55 色調 二つない褐色 脱土に砂が多量、白色針状物質混入		*	D-30
19-18	*	(VII)	内面一黑色處理、灯油痕若干付着 体部一横位ミガキ 外面一磨耗のため磨耗不整 口縁～体部一灯油痕付着 底面一磨耗のため切り難い不明 口径 10.7 底径 5.4 高さ 3.4 色調 淡黄褐色		*	4-7
19-19	*	(VIII)	内面一黑色處理、ミガキ痕は不鮮明、灯油痕付着 外面一ロクロ調整、灯油痕付着 底面一回転糸切り 口径 10.7 底径 5.8 高さ 3.0 色調 淡黄色		南区	D-28
19-20	*	(IX)	内面一ミガキ痕観察されず、灯油痕付着 外面一ロクロ調整 底面一回転糸切り 口径 12.9 底径 5.5 高さ 4.8 色調 淡黄褐色		南区	4-8
19-21	*	(X)	内面一黑色處理、灯油痕若干残る 口縁～体部一横位ミガキ 外面一ロクロ調整、灯油痕付着 磨耗 底面一回転糸切り? 口径 13.55 底径 6.8 高さ 5.1 色調 淡白色		南区	D-33
20-1	*	(XI)	内面一黑色處理、灯油痕若干残る 口縁～体部一横位ミガキ 外面一ロクロ調整、底部に手持ちヘラ削り 底面一回転糸切り 口径 12.95 底径 4.8 高さ 3.9 色調 二つない褐色		南区	I-1層 D-46
20-2	*	(XII)	内面一黑色處理、ロクロ調整痕が底部まで鮮明、灯油痕付着、ミガキみられず 外面一ロクロ調整、灯油痕付着 底面一回転糸切り? 口径 13.8 底径 6.8 高さ 4.35 色調 淡黄色		南区	4-10
20-3	*	(XIII)	内面一黑色處理、灯油痕若干付着 口縁～体部横位のミガキ 底部一放射状のミガキ 外面一ロクロ調整、底部に横位の手持ちヘラ削り 底面一回転糸切りの手持ちヘラ削り 口径 14.3 底径 6.45 高さ 4.2 色調 淡黄色		南区	D-27
	*	(XIV)			南区	D-1

図版 番号	種類 (分別)	特徴	(単位: cm)	出土地区 遺物・層位	写真図版 登録番号
20-4	土師器 (V)	内面-黒色處理、灯油痕若干付着 丁縁-体部-横位のミガキ 底部-放射状のミガキ 外面-ロクロ調整、外腹底部にナメあり 底面-回転糸切り 口径 13.6 深度 6.5 器高 4.65 色調 淡黄色		南区	
20-5	*	内面-黒色處理は6割とんでいる、ミガキ痕は観察されず 外面-ロクロ調整、磨耗がはげしい 底面-回転糸切り (V) 口径 14.3 底径 6.8 器高 4.7 色調 淡白色 脱土に剥離多い		D-21	
20-6	*	内面-黒色處理 丁縁-体部-横位のミガキ 底部-放射状のミガキ 外面-ロクロ調整 底面-回転糸切り (V) 口径 13.6 深度 6.2 器高 4.15 色調 淡黄色		D-3	
20-7	*	内面-ハラミガキ、黒色處理 外面-ロクロ調整、磨滅している 底面-回転糸切りか? (V) 口径 13.7 底径 5.6 器高 4.2 色調 淡黄色 反転凹化		東区	
20-8	*	内面-黒色處理、灯油痕若干付着 丁縁-体部-横位のミガキ 外面-ロクロ調整、灯油痕若干付着 底面-回転糸切り (V) 口径 13.6 深度 6.9 器高 4.7 色調 浅黃褐色		南区	
20-9	*	内面-黒色處理、灯油痕若干付着 体部-横位のミガキ 外面-ロクロ調整 底面-回転糸切り (V) 口径 14.0 深度 6.0 器高 4.15 色調 淡黄色		D-5	
20-10	*	内面-黒色處理、灯油痕付着、磨耗、ミガキは不鮮明 外面-ロクロ調整、灯油痕付着、磨耗 底面-回転糸切り? (V) 口径 13.8 底径 5.5 器高 4.55 色調 浅黃褐色			4-11
20-11	*	内面-黒色處理、ミガキは不鮮明 外面-ロクロ調整、黒色處理 体部-底部-灯油痕付着 底面-回転糸切り (V) 口径 14.0 底径 5.75 器高 4.3 色調 淡黃褐色			D-8
20-12	*	内面-黒色處理、灯油痕若干付着 丁縁-体部-横位ミガキ 底部-放射状ミガキ 外面-ロクロ調整、灯油痕若干付着 底面-回転糸切り (V) 口径 13.9 底径 5.7 器高 4.85 色調 淡黄色			D-14
20-13	*	内面-黒色處理 丁縁-体部-横位ミガキ 底部-放射状ミガキ 外面-ロクロ調整 底面-回転糸切り (V) 口径 14.7 底径 6.2 器高 4.8 色調 淡黃褐色			D-9
20-14	*	内面-磨耗のため黒色處理がかなりとんでいる、調整不明、灯油痕付着 外面-ロクロ調整、灯油痕付着、消耗 底面-回転糸切り (V) 口径 13.8 底径 6.8 器高 4.5 色調 淡黃褐色			D-19
20-15	*	内面-ミガキみられず 外面-ロクロ調整 底面-回転糸切り (V) 口径 13.65 底径 4.85 器高 3.9 色調 淡黃褐色		南区	
20-16	*	内面 黒色處理、口縁部の黒色處理がとんでいる 外面-ロクロ調整、黒色處理、口縁部の黒色處理がとんでいる 底面-回転糸切り (V) 口径 14.0 底径 6.4 器高 4.8 色調 淡黄色			D-20
21-1	*	内面-黒色處理 丁縁-体部-横位ミガキ、底部に灯油痕付着 外面-ロクロ調整、ロクロ痕が削除 底部に回転ヘラ削り 瓦蓋-回転ヘラ削り (V) 口径 13.95 底径 5.5 器高 4.35 色調 淡黃褐色			D-7
21-2	*	内面-黒色處理、灯油痕付着 丁縁-体部 横位ミガキ 外面-ロクロ調整 底面-手持ちヘラ削り (V) 口径 14.4 底径 6.0 器高 3.85 色調 淡黄色			D-4

固番号	種類 (分類)	特徴	(単位: cm)	出土地区 遺構・部位	写真回版 登録番号
21-3	上部器 环	内面一黑色處理、灯油痕付着 外面一ロクロ調整、灯油痕付着 底面一回転条切り (V) 口径 13.55 底径 6.15 高さ 4.6 色調 淡黃褐色		東区	
21-4	*	内面一磨耗がはげしい 外面一ワクロ調整、磨耗がはげしい 底面一回転条切り (V) 口径 13.3 底径 5.55 高さ 4.1 色調 淡黃褐色		*	D-22
21-5	*	内面一黑色處理、灯油痕付着 口縁一全体一横位ミガキ 外面一ロクロ調整、灯油痕付着 底面一回転ヘク割り (V) 口径 14.0 底径 6.85 高さ 4.2 色調 に赤い黃褐色		*	D-15
21-6	*	内面一黑色處理、灯油痕付着 口縁一全体一横位ミガキ 外面一ロクロ調整 底面 一回転条切り (V) 口径 14.5 底径 5.6 高さ 4.2 色調 水白色		*	D-6
21-7	*	内面一黑色處理、灯油痕付着 二槽一全体一横位ミガキ 残部一放射状ミガキ 外面一ロクロ調整、灯油痕付着、磨耗 二槽一全体一横位ミガキ (V) 口径 13.6 底径 7.2 高さ 4.05 色調 棕色		南区 5-2	I-I層 D-44
21-8	*	内面一黑色處理 二槽一全体一横位ミガキ 残部一放射状ミガキ、口縁部に灯油痕付着 外面一ワクロ調整 底面一回転条切り (V) 口径 14.5 底径 7.1 高さ 4.2 色調 淡黄色		南区	D-2
21-9	*	内面一黑色處理 口縁一全体一横位ミガキ、灯油痕付着 外面一ロクロ調整、塑形 底面一回転条切り? (V) 口径 14.3 底径 6.2 高さ 4.75 色調 に赤い黃褐色		東区	I-I層 D-45
21-10	*	内面一磨耗のため底面、黒色處理の有無不明 外面一全体的に磨耗 底面一回転条切り? (V) 口径 14.8 底径 5.2 高さ 4.25 色調 淡黄色		南区	5-3
21-11	*	内面一黑色處理、ミガキ調整、灯油痕付着 外面一ワクロ調整、灯油痕付着 底面一磨耗により切り離し不明、ヘラ括き「X」 (V) 口径 13.55 底径 5.2 高さ 4.5 色調 淡黄色		南区	D-26
21-12	*	内面一黑色處理 二槽一全体一横位ミガキ 外面一ワクロ調整 底面一回転条切り (V) 口径 15.4 底径 7.0 高さ 5.0 色調 淡黄色		南区	D-13
21-13	*	内面一黑色處理 口縁一全体一横位ミガキ 灯油痕付着 外面一ロクロ調整、灯油痕付着 底面一回転条切り (V) 口径 14.4 底径 5.2 高さ 4.1 色調 水白色		南区	D-31
21-14	*	内面一黑色處理、灯油痕付着 外面一ワクロ調整 底面一回転条切り? 底径 5.4		東区	S-D1 D-48
21-15	*	内面一黑色處理 口縁一全体一横位ミガキ 底部 放射状ミガキ 外面一ロクロ調整、底部、底面とも手持ちヘラ割り、底面に墨書き「虫」? 底径 6.1		南区	5-5
21-16	土器 高台付环	内面一黑色處理 底部一横位方向にミガキ、灯油痕付着 外面一ワクロ調整 底面一回転ヘク割り 色調 に赤い黃褐色		*	D-43
21-17	*	内面一黑色處理 外面一ワクロ調整 色調 淡黄色		*	D-42

図版番号	種類 (分類)	特徴	出土地区 遺構・部位	写真・図版 登錄番号
22-1	軒丸瓦 (I)	瓦当面-宝相華文　裏面-禪印き後ナデですり消し　瓦当裏面-丸形凹凸接合部ナデツケ 凸面-ナデツケ 凹面-布目痕(やや密)-側ナデによるすり消し　側面-ヘラケズリ(二段取り、一部三段)	南区 櫻品3	6-4 F-1
22-2	*	瓦当面-宝相華文　裏面-ナデ	南区 櫻品5	F-2
22-3	(II)	瓦当面-宝相華文　裏面-禪印き後ナデによるすり消し	南区 櫻品3	F-4
22-4	*	瓦当面-宝相華文　裏面-禪印き後ナデによるすり消し	南区 櫻品1	6-5 F-3
22-5	*	瓦当面-一変形連草文　裏面-磨滅著しく觀察不可能	南区 櫻品3	6-6 F-5
22-6	丸　瓦 (II)	凸面-平行叩き(二方向の斜方向)　叩き目斜位 凹面-粘土合わせ口、布目痕(緻密)　側邊-ヘラケズリ 側面-ヘラケズリ　小口面-ヘラケズリ	南区 櫻品1	F-12
22-7	*	凸面-平行叩き(二方向の斜方向) 凹面-布目痕(緻密)　側邊-ヘラケズリ 側面-ヘラケズリ	*	9-3 F-10
23-1	*	凸面-平行叩き(横方向及び斜方向) 凹面-布目痕(緻密)　側邊-ヘラケズリ (II)	東区 SD1	9-2 F-13
23-2	*	凸面-平行叩き(横方向及び三方向の斜方向) 凹面-布目痕(緻密)　側邊-ヘラケズリ (II)	東区 櫻品3	F-11
23-3	*	凸面-禪印き後ナデによるすり消し、先端部に斜方向の刻み 凹面-布目痕(荒い) (N a)	南区 櫻品3	F-17
23-4	*	凸面-ナデ (II)	南区 櫻品3	F-14
24-1	*	凸面-粘土合わせ口、布目痕(緻密)　側邊-ヘラケズリ 側面-ヘラケズリ(二段取り)	南区 櫻品1	9-4 F-15
24-2	*	凸面-ロクロ調整 (N b)	東区 櫻品3	F-8
24-3	*	凸面-ロクロ調整 凹面-布目痕(荒い)　粘土紐巻き痕らしいひび割れあり (N b)	南区 櫻品3	F-6
25-1	*	凸面-禪印き後ナデによるすり消し 凹面-粘土紐巻き底、布目痕(荒い)　布合わせ口　側邊-ヘラケズリ (N a)	*	F-7
25-2	*	凸面-禪印き後ナデによるすり消し 凹面-粘土紐巻き底、布目痕(荒い)　側邊-ヘラケズリ (N a)	南区 櫻品1	9-1 F-9
26-1	軒平瓦 (II a)	瓦当面-均整筋草文　額部-ナデ、鋸歯文　段部-ナデ、自然筋 凹面-布目痕、糸切模 凸面-禪印き(横方向)　糸添との接合部-ナデ　自然筋　側面-ヘラケズリ	南区 櫻品3	6-1 G-1

区 番	版 号	種 類 (分別)	特 徴	出土地区 遺物・層位	写真調査 登録番号
26-2		単 瓦	瓦当面一均整唐草文 頂部一ナデ、鉢尚文 段部一ナデ(横方向) (II a) 四面一布目痕(粗い)	南区 擾乱 3	G-3
26-3	*		瓦当面一均整唐草文 頂部一ナデ、鉢尚文 段部一ナデ(横方向) 四面一布目痕(粗い) (II a) 凸面一鉢部との接合部一ナデ(横方向) 朱が付着	東区	
26-4	*		瓦当面一均整唐草文 頂部一ナデ、鉢尚文 段部一ナデ(横方向) 四面一布目痕(粗い) (II a) 凸面一鉢部との接合部一ナデ	南区 擾乱 3	G-4 G-6
26-5	*		瓦当面一均整唐草文 頂部一ナデ、鉢尚文 段部一ナデ(横方向) 四面一布目痕(細密) (II b) 凸面一鉢部との接合部一ナデ	南区 I層	G-2
27-1	*		瓦当面一ロクロに抜き重弧文 頂部一劃縫のため不明 四面一模様が皆しいがわずかに布目痕が観察される (I) 凸面一廢盤のため觀察不可能	南区	
27-2	*		瓦当面一ロクロに抜き重弧文 頂部一ロクロ調整 四面一布目痕(細密) 先端部一ハラケズリ(横方向) (I) 凸面一ロクロ調整	南区 擾乱 2	G-9 G-10
27-3	平 瓦	(I b)	凸面一格子印き(斜格子、ほぼ長方形、格子の単位が大きい)	*	G-13
27-4	*	(II a)	四面一伏脊痕 布目痕(細密) 側邊一ハラナデ 凸面一格子印き(菱形、斜格子) 一部ナデによるすり消し 側面一ハラケズリ 小口面一ハラケズリ	南区 擾乱 3	G-7 G-14
28-1	*	(II a)	四面一模様 布目痕(細密) 侧邊一ハラナデ 凸面一格子印き(菱形、斜格子) 一部ナデによるすり消し 側面一ハラケズリ	*	G-15
28-2	*	(II c)	四面一布目痕(細密) 凸面一格子印き(長方形と菱形二種類の印き目がある。いずれも斜格子)	南区 擾乱 2	G-17
28-3	*	(II a)	四面一系切り底 布目痕(細密) 凸面一格子印き(斜格子、菱形) 側面一ハラケズリ	*	G-16
28-4	*	(II b)	四面一布目痕(細密) 凸面一格子印き(長方形)	東区 SD 1	G-18
28-5	*	(II a)	四面一伏脊痕 布目痕(細密) 凸面一格子印き(菱形) 一部ケズリによるすり消し 側面一ハラケズリ 小口面一ハラケズリ「X」の刻印?	南区 擾乱 3	G-19
29-1	*	(V)	四面一布目痕(細密) 凸面一ロクロ調整 小口面一ハラケズリ	*	G-31
29-2	*	(III)	四面一ハラケズリ 凸面一ハラケズリ	*	G-35
29-3	*	(II)	四面一系切り底 布目痕(細密) 凸面一平行印き(横方向及び斜方向、印き目細い) 側面一ハラケズリ 小口面一ハラケズリ	南区 擾乱 5	G-23
29-4	*	(II)	四面一布目痕 侧邊一ナデによるすり消し 凸面一平行印き(二方向の平行印き) 側面一ハラケズリ	南区 擾乱 2	G-21 G-22
30-1	*	(II)	四面一布目痕(細密) 一部ナデによるすり消し 凸面一平行印き(横方向に近い斜方向、印き目荒い)	*	G-20

図版番号	種類(分別)	特徴	出土地区 遺構・層位	写真図版 登録番号
30-2	平瓦 (II)	凸面-布目痕(微細) 凸面-平行印き(印き目荒い、斜方向) 側面-ヘラケズリ 小口面-ヘラケズリ	南区	7-2
30-3	*	凹面-布目痕 凸面-繩叩き(縦方向、荒い)自然釉 側面-ヘラケズリ(二段面取り) 小口面-ヘラケズリ	東区 SD1	7-3 G-26
31-1	*	凹面-布目痕 凸面-繩叩き 側面-ヘラケズリ(荒い、二段面取り)	*	G-28
31-2	*	凹面-布目痕 凸面-繩叩き(縦方向) 側面-ヘラケズリ(二段面取り) 小口面-ヘラケズリ	南区 機乱2	G-29
31-3	*	凹面-布目痕(荒い) 凸面-繩叩き(縦方向) 側面-ヘラケズリ(二段面取り)	南区 機乱1	G-30
32-1	*	凹面-布目痕(荒い) 凸面-繩叩き(縦方向)部分的にナデによるすり消し (IV) 側面-ヘラ削り(二段面取り)	南区 機乱5	G-31
32-2	*	凹面-布目痕(荒い)ナデによるすり消し 凸面-繩叩き(縦方向)部分的にすり消し (IV) 側面-ヘラケズリ(二段面取り)	東区 SD1	G-32
33-1	*	凹面-布目痕(微細)側面-ナダ(ヘラナダ) 凸面-繩叩き(縦方向)部分的にナデによるすり消し (IV) 側面-ヘラケズリ(二段面取り)	*	G-27
33-2	*	凹面-全面荒いナダツケ 凸面-繩叩き(斜方向)部分的にナデによるすり消し、指圧痕 (IV) 側面-ヘラケズリ	南区	7-4
33-3	*	凹面-刻印「木」、布目痕(やや密)先端部ヘラケズリ(横方向) 凸面-繩叩き(縦目細かい) (IV) 小口面-ヘラケズリ	*	G-33 8-2 G-12
34-1	*	凹面-刻印「木」、布目痕(やや密)先端部ヘラケズリ(横方向) 凸面-繩叩き(縦方向、縦目細かい)一部ナデによるすり消し (IV) 側面-ヘラケズリ(二段面取り)	*	8-1 G-11
35-1	鉄製品	端、内面に木質部付着	南区	9-5
35-2	銅製品	邊縁あり、不明	東区 SD1	9-6 N-2
35-3	土製品	蹲?	南区	9-8
35-4	土製品	有孔円板状(1孔)	東区 SD1	9-7 P-2



1. 左上・南区 ( $E \rightarrow W$ )、手前が S I 1 住居跡  
2. 右上・東区 ( $N \rightarrow S$ )  
3. 下、南区 ( $S \rightarrow N$ )、断面状況と風倒木痕

写真 1.



◀ S I 2 住居跡 (S→N)  
SD 1溝跡に切られている

4.



◀ S I 3 整穴造構  
(W→E)

5.

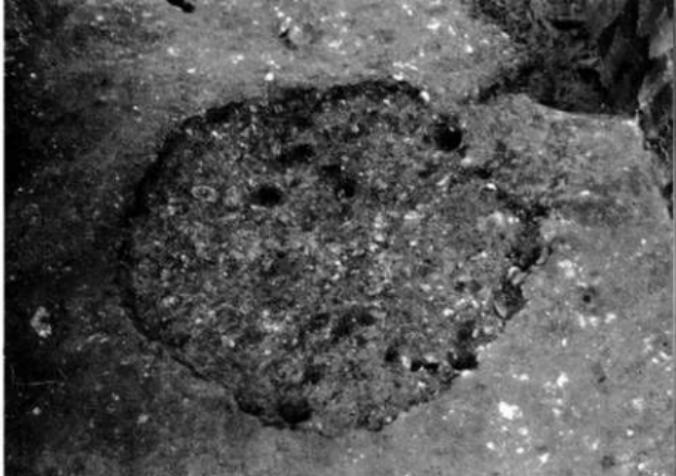


◀ 墓 塚 (S→N)

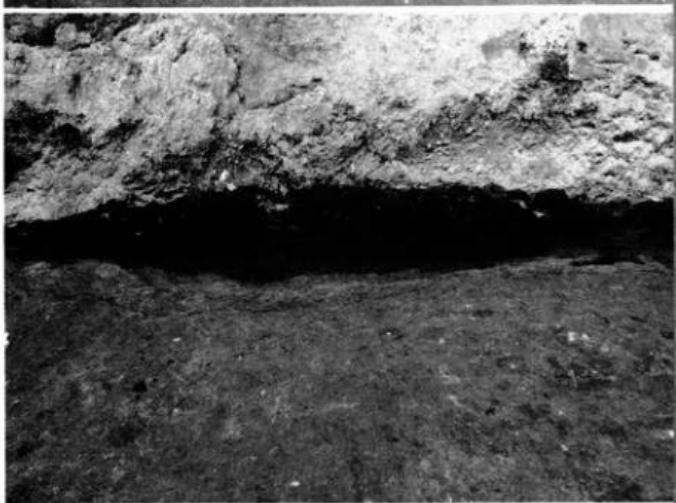
6.

写真2.

S K 1 土坑 ▶  
(E→W)



S X 1 性格不明遺構 ▶  
(S→N)



S D 1 溝跡断面 ▶  
(N→S)



写真 3 .



写真4.

写真4 土 師 器 I

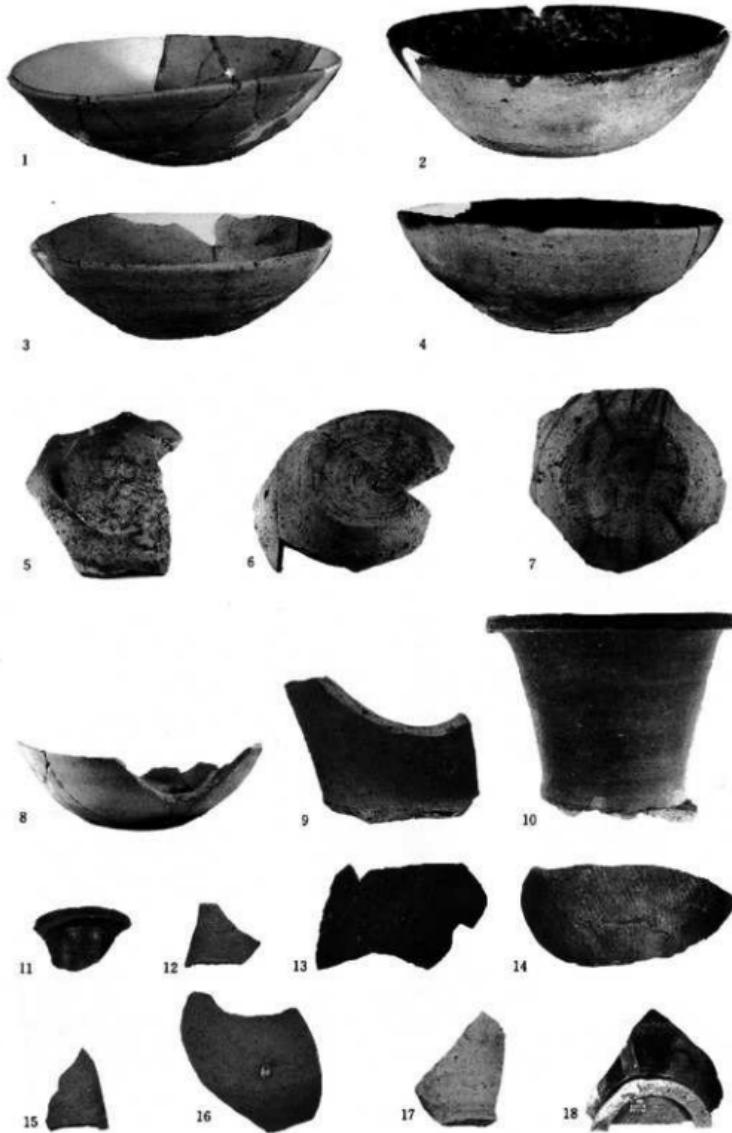


写真5 土師器II・須恵器

写真5.

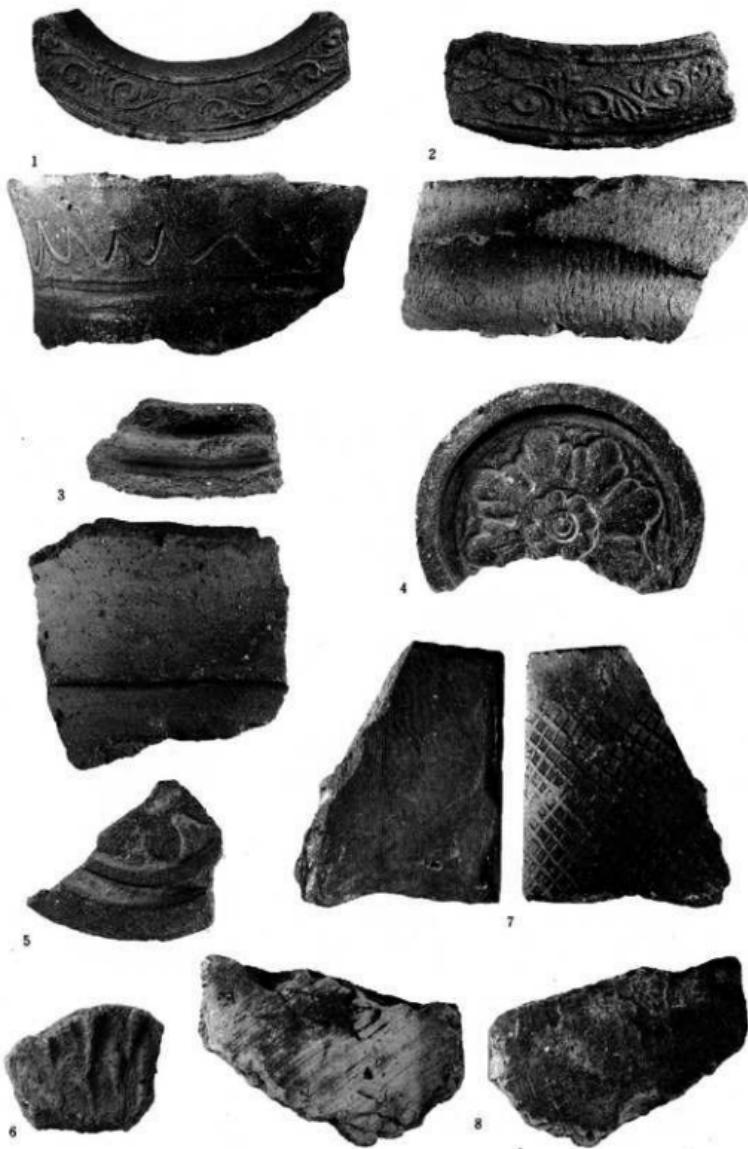


写真6.

写真6 瓦I

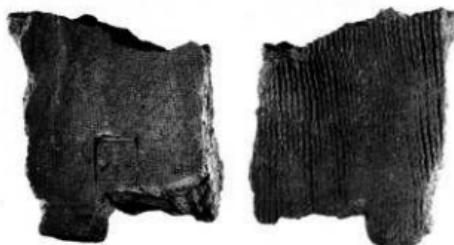
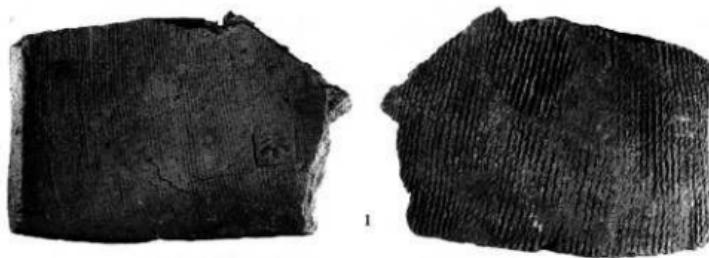


写真 7

瓦II

写真 7.

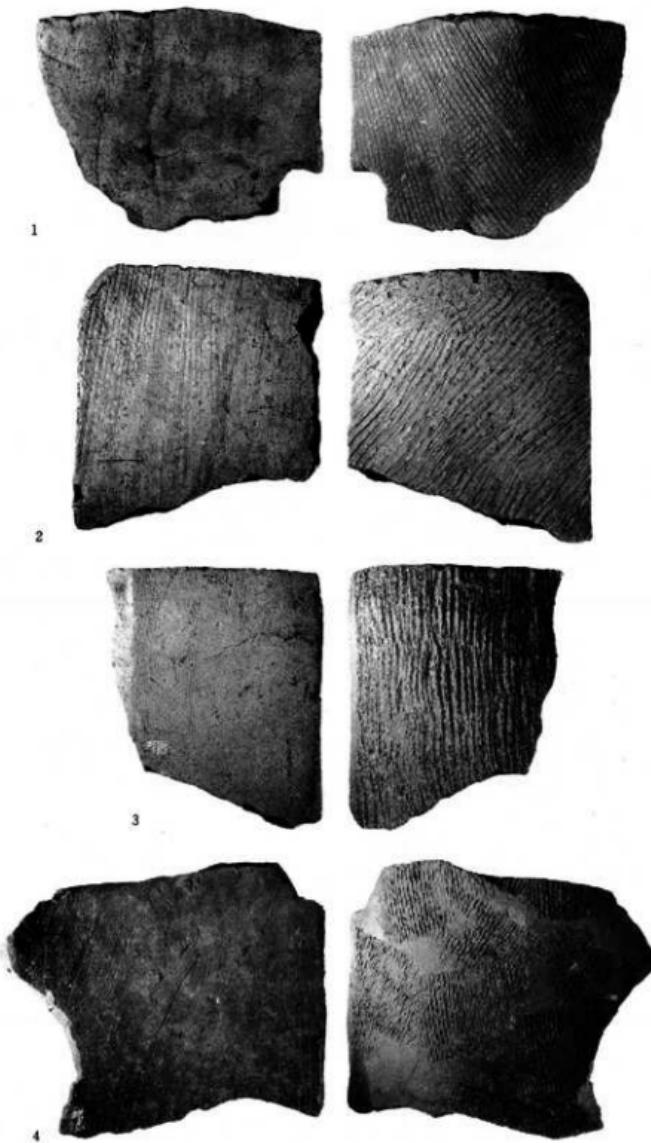


写真 8.

写真 8 瓦Ⅲ

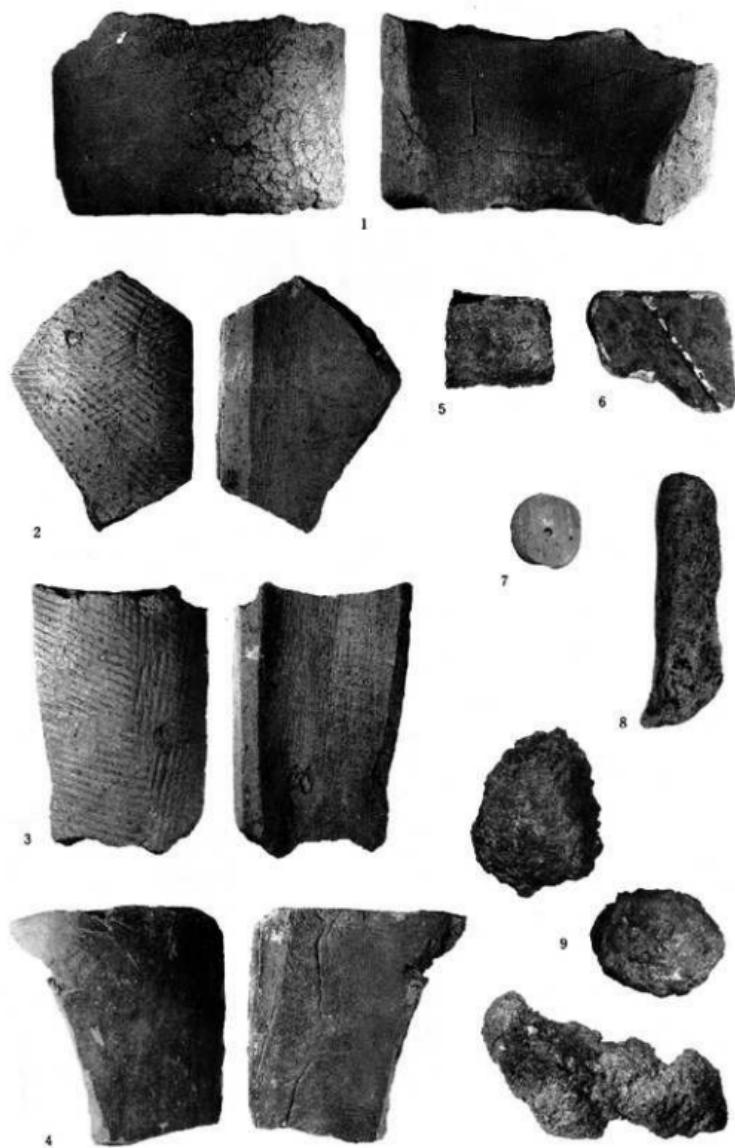


写真9 瓦IV、他の遺物

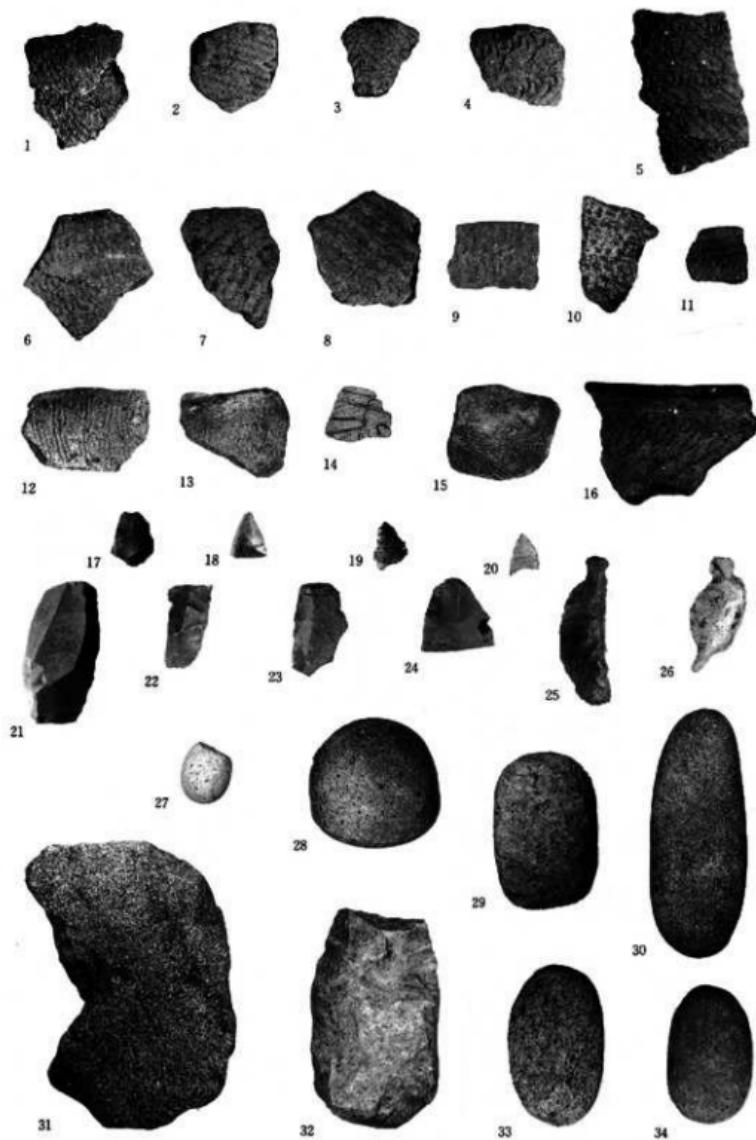


写真10 繩文土器、弥生土器、石器

仙台市文化財調査報告書第116集

## 燕沢遺跡

昭和63年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

TEL 261-1111(代)

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 263-1166

